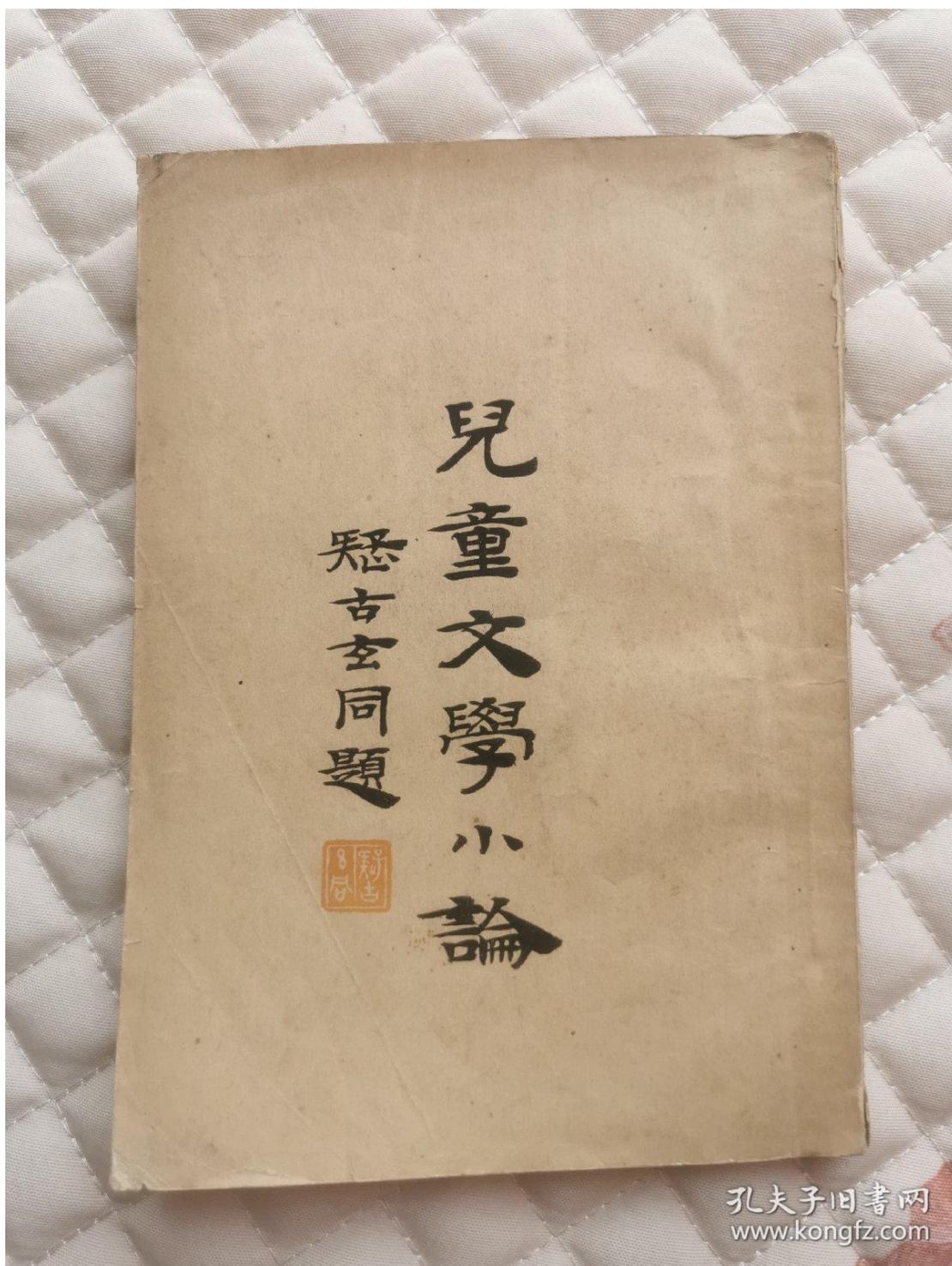


『児童文学小論』

周作人著

中島長文訳



【上海兒童書局 1932年3月初版表紙 『兒童文學小論』】

※出典元：孔夫子旧书网 <https://book.kongfz.com/13348/4745507019>

『児童文学小論』 版本及び目次

上海児童書局 1932 年 3 月初版

岳麓書社版 1989 年 6 月初版 據上海児童書局初版

河北教育出版社版 2002 年 1 月 據児童書局初版 止庵校訂 周作人自編文集

目次中、文章のタイトルの日本語訳の後に括弧に入れたのは原文の篇題で、日本語訳と同じになるものは省いた。

序	(4)
童話略論	(6)
一 緒言	(6)
二 童話の起源 (童話之起原)	(6)
三 童話の分類 (童話之分類)	(7)
四 童話の解釈 (童話之解釈)	(7)
五 童話の変遷 (童話之變遷)	(7)
六 童話の応用 (童話之応用)	(8)
七 童話の評価 (童話之評隲)	(9)
八 人為的な童話 (人為童話)	(9)
九 結論	(10)
童話研究	(11)
古童話釈義	(20)
その一 吳洞	(20)
その二 旁随 <small>ぼうい</small>	(22)
その三 女スズメ	(24)
わらべ歌の研究 (児歌之研究)	(27)
児童の文学 (児童的文学)	→ 『芸術と生活』
神話と伝説 (神話與伝説)	→ 『自分の畑』
歌謡	→ 『自分の畑』
児童の書 (児童的書)	→ 『読書雑記』 三卷 34
科学小説	→ 『読書雑記』 三卷 37
呂坤の『演小児語』 (呂坤的演小児語)	→ 『読書雑記』 三卷 33
『童謡大観』を読む (読童謡大観)	→ 『読書雑記』 三卷 31

序

張一渠君はわたしが本省〔浙江省〕第五中学で教えていた時の学生である。その時は民国二年から六年で、六年の春の末にわたしは北京にやっけて、以後帰ったことがない、その頃張君はもうとくに卒業していた。十九年の冬突然張君からの手紙を受け取り、今上海で児童書局を創業してもっぱら児童用のあらゆる書物を出版しているので、助けて欲しいということだった。このことは願ってもないことだった、児童のために出す読み物は今では切迫した仕事であったから、わたしもかつて指を染めようとしたことがあったが、しかし教師という仕事は実際暇そうに見えて忙しく、口ではうんと言っけて随分時間が経つものの、手元には相変わらず何の成績もない、実を言う、実にまだ手をつけてないのである。みすみす民国二十年ももうおしまいだ、このように引き延ばすのはやっぱり無責任だと思ったので、まず一冊小冊子を編んでいささか責めをふさごうと決心し、年を越せばまた別の仕事を計画することにした。手紙で張君に知らせると、彼も応諾した、その結果がこの『児童文学小論』一冊である。

ここに収めたのは全部で十一篇。前の四篇はいずれも民国二、三年の作で、文言で書かれている。「童話略論」と「研究」は書いたものの発表するところがなく、商務印書館がそのころ世界の童話を何冊か出して、わたしはちょっと批評したが、そこではまだ必要としないだろうと思った、そこで中華書局の『中華教育界』に送ってやり、手紙で、奉送するがただ当該雑誌を一年分送って欲しいと書いてやった、多分定価は旧時の一円半であったろう。何日か経って、原稿は戻されてきた、使えないと言うのだ。ちょうど北京教育部編纂処が月刊を出していたので、ただで送ってやってそこに載せ、悪しからず続きは書かないと言っけて、終わりとした。それからは県の教育会が出版物を出そうということになって、わたしが編集をやり、二篇の童話とわらべ歌の論文を書いて、余白を補ったが、一年も経たずしてまた改組になり、わたしの鬱陶しい文章はあまり適当ではないので、そこで店を畳んで、六七年沈黙した。民国九年に北京の孔徳学校が講演に招んでくれ、そこで又ひとしきり喋った、それがこの第五篇『児童の文学』である。以下の六篇はみな民国十一二、三年に書いたもので、その時から児童文学に注目する人が多くなり、専門に研究する人もようやく現れて、わたしのこの“生かじり”の芸と比べてずっと強力になった、だからそれ以後にはもう書かなくなった。今年『東方雑誌』の友人が原稿を求めたので、何篇か『苦茶随筆』を書いた、その中の第六がアンドリュー・ラング (Andrew Lang) を紹介した小文で、題を『習俗と神話』とし、三月号の『東方』に載せた後この小冊子に収めるつもりであったが、思いがけず上海の変が起って、閘北が兵火に見舞われ、何篇もの随筆の原稿がなくなり、追求のしようもなく、これでおしまいとするしかなかった。

わたしの書いたこれらの文章には欠点がとても多い、その理由はとても簡単明瞭である、児童文学の問題を研究検討するには、人類学・民俗学・児童学に関して相当の教養が必須であるが、わたしはそれについてはほとんど丸裸の素人である、故郷の言葉では白木と言うのがそれである、どうすればよいか？二年前わたしは自分をこう紹介したことがある、“彼はもともと海軍出

身であり、自分でも決して文人でない、むろん学者ではないことを知っている、彼の仕事は雑役でしかなく、薪割り水汲み掃除といった類の仕事である。たとえば歌謡・童話・神話・民俗に関する収集、東欧日本ギリシア文芸の翻訳は、いずれも面白がって手を貸したが、これは本当に人手が足りないからやれたことで、たとえばそれぞれに専門の人がいる場合は、こっそり逃げ出して、別に掃除や薪割りの芸をこなすしかなかった。” だからこうしたものはそれだけのことであつて、もともとなんの結集の価値もないのである、それ日月出でたれども燭火は熄まず、その光におけるやまた難からずや、という道理はわたしも知らないわけではない。しかしながら中国の事情は多くが意外なことから出る。この何篇かの文章は浅薄だけれども、人類学派の学説にもとづいて神話の意義を見、児童心理学にもとづいて童話の応用を語った、この方向は総じて誤ってはいないし、現今の児童文学界においてもまだ活用の箇所がないわけではない。中国は奇怪な国である、主張は定まらず、反復循環し、児童本位の文学の提唱の後にまた読経〔儒教經典の暗誦・学習〕とくる——某派の經典を児童歌謡の中に盛り込もうという運動が起こる、これは私塾で『大学』『中庸』を読むのと何の違もない。だからわたしはこの小冊子は現在でもまだその活用のところがあると信ずる、あえて心からわたしは本当に児童の福利を顧慮している父兄と教師たちに捧げる。これがわたしがこの書を刊行する主要な目的であり、ボロ箒の自慢〔ボロボロの箒でも自分のはよいとする。成語。〕と、張君が原稿を求めてきた雅意への応酬については、実はその次なのである。

民国二十一年二月十五日、北平にて。

※初出：『児童文学小論』

童話略論

一 緒言

児童教育と童話の関係は、近ごろ少しは論究する人が出てきた、だがその根本を考えず末ばかりに捉われるので、誤らないものが少ない。童話研究は民俗学を拠り所とし、その本源を探り、さらに児童学によって補い、その応用の範囲を定めるべきで、そうすれはうまくゆくだろう。いささか知っているところを挙げて、この事に留意するものと相談してゆこう。

二 童話の起源

童話 (Märchen) の本質は神話 (Mythos) と世説 (Saga) と実は一体である。上古の時は、宗教が初めて芽生え、民はみな物を崇拜し、その教えは天下の万物は各々生氣があると考え、故に天神地祇、物魅人鬼は、みなそれぞれに一定の機能があり、生きた人間に異ならず、その時の信仰に基づいて、演繹して物語となり、かくして神話が生まれる。その次に又神人の事を述べ、みな信ずるところとなる、ただ尊敬はされるが威嚇したり恐れられたりはしない、これが世説となる。童話というのは、これと同じ物だが、伝奇を主とする、その時代にはみな人も土地も定まった名がない、それで娯楽に供する事を主とするのが、世説と童話との区別である。これをつづめて言えば、神話は原人の宗教であり、世説はその歴史であり、そして童話はその文学である。

故に同一の伝説が、甲の地では神話となり、乙の地では童話に成り下がるが、大抵は文化の変化とともに推移する。故に童話は神話・世説の支流であるに過ぎず、それが流行する区域は児童に限られないばかりか、特に文明国では、古風がますます変わり、こうした伝説は多くが児童が喜ぶところとなり、それでそれによって保存される、しかしながら農民社会における流行も広範なのは、その心理が単純で、小児と同じで、原始思想と合うからである。あるいは童話の起源は児童の好奇心の強さと質問の多さによるので、大人が物語を作ってその要求に応じたのだと考える人もあるが、それは望文生義で、正解には当たらない。

三 童話の分類

童話は大要二部に分けられる。

(一) 純正の童話、つまり世説から出たもので、二類に分かれる。

甲 思想を代表するもの、多く天然物を主とし、さまざまな想像から出て、ずらりと靈怪を備え、変形や復活などの様式はみなそれである。又物源童話は、事物の原始を説明し、猿はどうして尾がないのかなどもまたこれに属す。

乙 習俗を表すもの、多くは人事を主とし、また極めて幻怪で、今日では荒唐と見なされるが、実は原人の礼俗に基づき、食人、女性の略奪などの様式の童話がこれに属する。

(二) 遊戯の童話、世説から出るのでなく、娯楽を作用とするものは、三類に分かれる。

甲 動物談。動物の習性動作を模写し、キツネの狡さ、狼の食欲さなど、それぞれその本色によって物語を作る。

乙 笑い話。多くは人の愚鈍を書いて誤りを風刺し、哄笑に供する、後世のふざけた歌曲、越中のバカ婿物語など、その話が多い。

丙 重複物語。さまざまな事を次々と述べたり、あるいは反復重複して、次第に益々引き伸ばし、初めから意味などないが、児童は甚だこれを好む、イギリスの **That is the House Jack built** が最も有名である、これは多分わらべ歌と童話の間にあるものであるが、郷村の農民もこれを楽しむから、もちろん純粹に児童に属するとは言えない。

四 童話の解釈

童話の取材範囲は怪異が多いうえに、叙述がまた簡単で、率然と一読しただけでは、その意味がわからない、古人はそれで荒唐の言で、考えるに値しないと思ったり、あるいは道德に付会して、外は出鱈目な言葉を借りているが、中には微旨が込められていると考えた、例えばイギリス人のベイコンなどは、すなわちその一人である、近世のドイツ人ミュラー (Max Müller) は語弊説で解釈しようとしたが、また結局はうまくいかなかった。イギリスのアンドリュー・ラング (Andrew Lang) が初めて人類学の方法によって比較神話学を治め、そこで世説・童話の真解を得た。その意向は今の人間が童話を読んでもその意味は理解することができない、けれどもその源流を考えれば上古より来る、又その一方蛮地にまで流れ、土人の伝説にも類似のものがあるから、童話の本意は今の人間には知ることができないけれども、古人はそれを知っていた、文明人は知ることができないけれども、野人はそれを知っていた、いま野人の宗教礼俗を考えると、おおむねそれが持っている世説・童話の中の事蹟と両方が吻合する、それで童話の解釈が人類学に求めて得ることが難しくないことがわかる、けだしおよそ神話・世説から童話に至るまで、みなそれによって原人の思想とその習俗を表しているものに他ならないのである。

いま変形の事などは、童話の中に多くある。人獣が形を変え、木石が物を言う、事柄はとても不思議だけれども、野人は篤く精霊を信じ、人禽木石は、ともに精気を具え、体はただ寄託する所で、随意に変化するの、まさに当然で、異とするに足りない。それが人を殺して食い、女を掠めて妻とするなど、野蛮社会ではやはり習見する事である。童話では又帝王は多く兒戯に近く、王子は野に猪を飼い、行人が門を叩くと、王は自ら靴を逆さまに引っ掛けて開け閉めすることを言うが、これはやはりわざと簡単にして、童心に合うことを求めたのではない、実は曾長の制度の下で、そのいわゆる元首の尊嚴とは、まさにこんなものに過ぎないのである。ここがわかれば、すなわち童話の解釈を明らかにするのは難しくない。

五 童話の変遷

童話の中の事実が民族思想および習俗と合致するからには、当時の人心においてもとより詭異としない、文化が進歩すると、古い習俗がしだいに改まり、ただ伝説の中にだけなお痕跡が残

る、ところが時代が遠くなり、その昔を忘れると、異俗が人を驚かすと考え、すっかり粉飾を加え、ついによりやく本真を失うに至るが、ただ原を推測して始まりを明らかにすれば、なお知ることは難しくない。童話の中の食人の風習は、その初めはもともと人が自ら食い合うが、しだいに変化して物怪となり、ついにはまた改めて猛獣になる。又物と物とが結婚する方式の童話は、最初は獣が人と連れ合いになるもの、ついで物怪が幻をつかって人となることができるもの、最後はもともと生きた人間であるのが、魔法にかけられて、しばらくは獣の形になるが、また魔法が解けて抜け出せるというものである。およそこれらはみなその時に応じていかようにも仮託され、俗を驚かすのを免れる、変遷の迹が、至って顕著なものである。

故に童話というのは、原始宗教およびそれと関係する習俗に基づいてできあがる、ただ時代がすでに遙か昔で、やはり自然にさまざまな変化が生じ、放逸な思想、奇怪な習俗、あるいは凶悪無惨な事柄で、その時代の人心と抵触するものは、自然と淘汰され、新式のものとなる。今の童話によって児童を教えるものは、多くが素材を伝説に取り、述べて作らず、ただ繁を削り汚穢を去り、用途に合うことを期待している、つまりこうした考えに基づけば、いい加減に造作するものよりもはるかに優れたものになる。

六 童話の応用

童話を教育に応用することを、今の世の論者は多くが益ありと称する、ただ主張するところはやはり人によって殊なる、今はただ私の意見にもとづけば、童話の児童教育に有用だと思われるものは、ほぼ三つある。

(一) 童話とは、原人の文学であり、またすなわち児童の文学である、個体発生は系統発生と順序が同じである、故に二者は、感情や趣味がほぼ同じで、いま童話を児童に聴かせれば、十分にその物語を聞いたがるという要求を満足させられるし、かつ自然に順応し、発達を助長して、それぞれの時期の児童にその自然な状態を保持させ、その成長過程に応じて進ませるのは、まさに幼児保育の核心である。

(二) およそ童話の適用は、幼児期が最も良い、だいたい三歳から十歳まで。そのころの幼児は最も空想に富み、童話の内容がちょうど適合しているので、それによってその想像を養え育てれば、たとえ繁雑豊富でも、感受力もしだいに敏捷になり、後日の学習の基礎となる。

(三) 童話は社会生活を述べて、大体のところは備わっているが、ことごとくを単純化しているので、児童がこれを聞けば、人事の大概を理解することができ、将来社会に出た時の備えになる。又そこで述べる事物および鳥獣草木は、みな見慣れていて、多くが名と物とを知るので、習い覚えにも役に立つ。

以上三つは、みな見やすいところで、訓戒をこめることなど、その次のことである。ドイツの学者は「狼と七匹の子山羊」（『グリム童話集』第五篇）の話は母子が相依ることの意味を教えるので、童話の本事を借りて、児童の注意を引き起こし、暗にそのわけを示すに過ぎないのであって、寓言の作用なども、まさに人にそれと気づかせることにあるのだとしている。のちに格言

とするのは、なお蛇足のようなものであり、それで道理を並べ立てたところで、数歳の児童の理解するところではなく、興味も又索然と尽きてしまい、まさにその本来の価値をなくしてしまう。

七 童話の評価

民族の童話はたいていが優劣混淆で、全部が全部教育の用に合うものではないから、よく選択して取らなければならない。いまその備えているべき点を挙げてみると、いくつかある。

- (一) 優美であること。芸術をもって童話を論ずれば、美が重きをなす、ただその美は修飾にあるのではなく自然であることを重んずる、もし造作付会をすれば、趣味がそのために殺がれ、俗悪なものは論ずるまでもない。
- (二) 新奇であること。この点はおよそ天然の童話なら大抵これをもっている。
- (三) 単純であること。単純はもともと童話固有の優れたところであり、童話が児童の心理に合うのもそのためである、結構の単純さ、脚色の単純さ、(人も場所も皆定まった名がない) 叙述の単純さなどは、みなその特色である。事柄が複雑で、叙述が冗長、又意味深長であるのは、はなはだ忌むべきところである。
- (四) 均整であること。段落が整っていて、偏頗なところがないこと。順序がでたらめであったり、首尾が照応していないのは、みな取るところではない。故にまくらや幕間劇を多用して、篇幅を足したり、いたずらに混雑を見せたりするのは、なんの役にも立たない。

中国の童話はまだ収集されておらず、いまあるのは、翻訳によるもので、『おやゆび姫』および『ガラスの靴』がよい、それが純正な童話であるからである、『猫のいない国』はイギリスで盛行しているが、『今古奇観』の「洞庭紅」の物語のようなもので、実は世説の類である。『おやゆび姫』は各国にみな伝説があつて、『グリム (Grimm) 童話集』の第三十七および五十がいずれもその一部であり、イギリスに伝わるのはチャップブック (Chap-book) の中の一本が優れていて、滑稽の趣が多い。『ガラスの靴』は通称灰娘 (Cinderella) で、その事柄はみな上古の礼俗に基づいていて、はなはだ探究検討に耐える、いま通行しているものでは Perault [ペロー] の述べた本が最も良い、漢訳ⁱは刪改が多過ぎて、その本来の意を失っている、瓜の車にネズミの馬など、夢に託しているのに、老婆が突然出てきたりして、筋がつながらず、靴を手にして妻を探すのは、履き物をなくすことと呼応しないので、後のゴールインが訳のわからないものになるのは、特に支離滅裂の欠点である。このほか中国の史実で、もともと童話ではないが、伝記故事にしたならば、少年期の需要に応じられるものがある、陶朱公の事など、世態人情などに閱歴が深い、ただ幼児に理解できず、それにその気分も鬱陶しく、愉快的感じはないので、やはり童話に適するものではない。

八 人為的な童話

天然の童話は又民族の童話とも称される、その対になるのは人為の童話で、又芸術的童話とも言われる。天然の童話は、自然にできたもので、種族の特色を備えており、人為的な童話は文人による著作で、個人の特色を備えていて、大きい児童に適するので、各国に多くある。ただ著作の童話は、その仕事ははなはだ難しく、児童心理を熟知したものでなければ試みることはできない、自ら児童心理を具えているものでなければうまくやれない。いまヨーロッパの人で童話を作るのはデンマークのアンデルセン（Andersen）が最も巧みであるが、その天性の自然によるもので、行年七十にして、童心を改めない、だからこのようにできるのであって、そのほかのものは誰も悪くいうものがない。したがっていま人為的な童話を用いるのは、やはり多くがアン氏に限られ、そのほかにはアメリカのホーソン（Hawthorne）などもいるが、その著作はたいていが古代神話を述べ直して、潤色を加えたものでしかない。

九 結論

上に述べたことで、すでに童話の性質、および児童教育に応用する時の要点を明らかにしたが、いまそれを総括すると、教育童話を研究するには、一に民俗学に拠るべきで、そうでなければ童話とはならない、二に児童学に拠るべきで、そうでなければ教育に合わない、そして教育童話を研究しようとするものは、純粋な童話から始めなくてはならない、これが起源および解釈において三つのことに注意しなくてはならず、その初歩において誤らないための所以である。

※初出：1913年11月15日『紹興縣教育會月刊』第2號ⁱⁱ

ⁱ Perault の漢訳 後に出る「古童話積義」の冒頭に『玻璃鞋』のことが書かれているから、刊行時期はわからないが、確かに商務印書館刊行のもので、樽本照雄氏の『新編増補清末民初小説目録』に著録される「『玻璃鞋』孫毓修編纂 上海商務印書館 貝洛爾童話」それだろうと思われる。

ⁱⁱ 『周作人文類編』第五卷は「1912年作、『教育部編纂処月刊』第1巻第7期」とする。

童話研究

一

童話 (Märchen) の源はおそらく世説 (Saga) から出るだろう。ただ世説に載せる事は、確かに固有のもので、時・所・人・物、みな決まった名があるが、童話は漠然としていて指すところがない、これがその大きな違いである。人類の初め、まだ文化や歴史がなかったころ、人知がようやく開け、自然が神化され、人事がさまざまに変化するにつれ、感受したところを複合して、神話世説を作り、そこに印象感情を託した、教化がしだいに進むにつれ、信仰保守するところも移り、伝説もしだいに忘れ去られ、それが流れて童話となった。これを中国に徴してみると、おおむねはそのようであるが、文化の及ばぬ野蛮人は、異邦の童話を聞けば、常に神人の名前をつけ、それを記録して世説として用いた。二者の間には、もともと大きな垣根がなく、ただ民俗を感化する違いで、転移が生じただけのことである。

故にいま童話を語るとすれば、併せて世説に及ばざるを得ないが、その本源の解釈は比較神話学に求めるべきであろう。文教が大いに開け、社会の俗習も悉く革まり、今になって昔の話を聞けば、すでに意味は時と共に消え、通釈することができない、西方の学者は多く事実と比較したり、あるいは語源を研究したりして、その指すところに通じようとしたが、付会の説は、ただ錯誤を増やすばかりであった、イギリス人アンドリュー・ラングが出るに及んで、人類学の方法によってこれを比較した。古説はでたらめで、今ではその意味がわからないが、絶域の野蛮人だけがよくその意味を理解した、その礼俗に徴すると、詭異な点がよく似ており、付き合わせてみると、いちいちが合致し、そこで神話の本当の意味がわかるようになった、本は風習に基づき、今いわゆる無稽の言が、当時にあつては、すなわち実に文明の確かな歴史であったのだ。

原始文明が神話に現れるのは、大まかに言って二つの本がある。一つの本は思想であり、一つの本は制度である、二者は又互いに入り混じる。原人の宗教は多くは精霊信仰 (Animism) であり、人禽木石みな生氣を持ち、形体は異なるけれども、精魂に変わりはなく、自ら出入りして、形に付いて留まることができる、これから推し測ると、神話の変形様式が生ずる。人獣は一視同仁で、物の力が特に暴力的で、恨めば敵となり、恩を感じれば親友となり、それで獣友および物婚の様式が生ずる。獣を崇めて祖先とし、トーテムの制がたてられる、その法令は同宗の獣は食わず、同じトーテムのものを妻とするのは、法として不敬となる、男子は必ず外婚で、強奪を礼とするので、女子を盗む様式が生ずる。ついでまた、形と神とがそれぞれに分かれ、そのため体軀は損なわれても、招魂すれば生きられる、そこで回生よみがえりの様式が生じ、そして魂を隠したり生死の符という諸様式がこれに付随する。又連想作用で、虚実が相接し、そこに感応魔術が生まれ、部分によって全体に及ぼすことができ、爪を呪詛して名前を呼ぶとその体を損なう、そこで名を呼ぶのを禁止する様式が生ずる。家を相続するには幼いものからし、飯炊のような位でも〔家を継ぐことができる〕、そこで末子相続の様式が生ずる。異族同士は相食み、そこで食人の

様式が生じ、人をもって鬼を祀るのも、また多くある。以上述べたのは、みな見るからに目立つ大きい者で、一例とするに足る、詳細に細かく引くとすると、わたしには全部は挙げられない。

又童話（および世説）の中で帝王の事を言うのなど、その有り様は至って尊厳であるけれども、躬らの立ちい振る舞いは、普通の人間と変わらない。ギリシアの史詩『オデッセイア』

(*Odysseia*) は記している、王が牧人と友になり、門前がすなわち豚小屋である、オデュッセウスがダイガイアの島にゆくと、王女が川で着物を洗い干しているのを見るなど。グリムが集めた童話にも、また言う、昔この郷では、小王が数人、山丘の間に散居していたと。この数例によっても、部落の遺風は、ほぼ見ることができる、いわゆる王とは実は酋長で、そして王女の降嫁は、下男にまでおよび、位は息子には伝えられず入婿に帰す、これは母系制時代の婚姻相続の法と、まさに一致する。

およそ童話で男子が求婚するのは、往往にして先にさまざま難題を経てのちにそれを手に入れるのだが、最後にはまた、顔貌が同じような女たちを並べ立て、自分で弁別させる。今の世でももとよりこの風習がある、ハンガリーの田舎では結婚の夕べに、新婦は二人の女友達とカーテンの後ろに隠れ、男子に当てさせる、フランスのルソーの地〔未詳〕でもそうで、マレー・エジプト・スルー〔ブルキナファソ〕諸国にはみなこの風俗がある。その意図はもともと互いに難癖をつけるのではない、ただことさらに惑わして、速やかに見分けられないようにするのである。おそらく古人の初めの主旨では、男女の結合は、至って神秘的な意味を持つので、そのためこうしたさまざまな儀式をやって、不吉を払ったのである。いまヨーロッパの習俗で新婦が婚礼をする時、多くが女友達を従えるのは、まさしくその遺風であって、越中にも伴姑という名がある。

又童話は多く娘を攫う事を言うが、上古の掠奪婚の名残である。言うところは皆人間の形を具え、異物ではない、従って物婚の様式とは違う種類である、その人間は概ね巨人で、あるいは多頭一目のものであり、ゲルマンの童話では多くがこびとを言う、フランス・イギリス諸国では地中の人間で妖精フェアリー (*Faerie*) と言い、アイルランド人はその名を忌んで善人と言う、みな人間の子供を取ることができる、ただその実を考えるに、昔の亡国の民や、あるいは異族であるに過ぎない。ギリシアのホメロス (*Homerus* あるいは訳してホーマーという) の詩にライシチェリガンというのがあって、夜半に日の出る土地にいる者だが、実は北欧の先民である。けだし異族に迫られるところでは、それぞれが恐れを抱き、亡国の民は深く秘密の土地にその跡をくらし、萎縮した状態になる、ようやくのことで時移り境遇が変わり、記憶が曖昧になると、伝説古事は、ただ茫漠としたものしか残らない、故に強者には巨人のようなのがあり、弱者にはこびとのようなのが出て、神怪に付会して、そこにこんな説が出来上がる。中国の童話にはこんなのは少ないけれども、『山経』〔『山海経』の山の部〕に記されるものには三身一臂〔三つの体に一本の腕〕の民が多いのも、やはりこういう意味である。

こんどは中国の童話について、少し証明解釈を加えて、実例とする。ただ長く散逸していて、それに又誰も採集するものがなく、ほとんど蕩然として掃き去られた状態になろうとしている、故にいまここに言及するのは、ただ子どもに聞いたものを主とする、一二の取るに足りぬ作で、又越の地に限られ、深く欠漏を恨むけれども、やむを得ない。なお他日博搜収集せんことを期し、さらに研究を深めんことを願うばかりである。

越の童話に「蛇郎」というのがある、だいたい次の通りである、木樵に三人の娘があった、ある日山に入って、娘の欲しいものを尋ねた。幼いのが綺麗な花を一枝欲しいと言った、木樵が花を折っていて、蛇郎に遇った、娘を一人嫁にくれ、でなければ呑み込むぞと言った、末娘が行かしてくれと言い、他日その姉が訪れ、その豊かなのを妬み、誘って池を覗かせ、溺れさせて殺し、自分が身代わりになった。娘は死んで鳥となり、（越の習俗では清水鳥という名で、多く澄んだ水の池で蛆虫をとって食とする）木の間で悲しそうに泣いた、姉はまたそれを殺し、（別の話では、米の研ぎ水の甕に溺れさせて殺すとする）庭に埋めた、すると棗の木が生えた。蛇郎がその実を食べると、とても甘かった、姉が取って食べようすると、皆毛虫に化けた、そこで伐ってかまどの腰掛けにした、蛇郎が坐るととても気持ち良く、姉が坐るとひっくり返った、また砕いて燃やすと、木は爆裂し、姉の目に当たって、そうして盲になった。（別の話では、火が出て姉の手を焼きそれで廃人になった。）

案ずるにこれはヨーロッパの童話では「美女と野獣」の類であって、いわゆる物婚の様式であろう。野蛮の民は、人と獣を同一視し、大猪長蛇も、ただ人間に甲羅があって毛が生えている者に過ぎず、もともと異物ではないので、通婚も可能なわけで、ましてやトーテムの意味が民の心にあれば、物婚の事は、たとい当世に見ることができなくとも、もし昔はそうだったのだと言えば、深く信じて疑わないのである。東方の習俗では、術数に寄託して、人を鳥や木に配して、禁忌とすることがある、インド人がやる、連れ合いを亡くすのを呪いで止められると言うのなどは、まさに古風の遺留である。

物婚様式の童話で最も純粹に近いのは、中でも獣の連れ合いであり、皆異類だと信ぜられている。北米の土着民の伝説では、多く婦人が蛇と連れ合いになる、極地の住民もまた娘がヤモリに嫁す事を言うが、そのトーテムの起源に関する伝説が特に多い。中国に伝わる槃瓠の民*は、その一例である。後世になって、ようやく修飾が加えられて、その物が形を変えて人になることができ、あるいはもともと人類であったのが魔法にかけられていたものとなる、西方の「美女と野獣」の説は、その第三類である、けだしその初めは物であり、ついで物怪となり、又ついで人となる、変化の跡は、概ねこのようである。

この様式の童話の中で、多くは花を折るという一節を具えている、けだしこれもタブー（Tabu）に属するのであろう、又草木万物にはみな精霊があり、みだりにそれを砕き折ると、その怒りに触れるだろう、故に野人が獣を捕獲すると、必ずその靈魂に祈り、あるいは罪を弓矢になすりつけたり、木を伐れば枝を折って大地に挿したりするのは、それが元居たところに代えて、幽魂によるべを与え、悪さをしないようにしたもので、ここにその心を見ることができるようだ。

化け鳥の一節は、多くが古妻様式の童話に見られ、大抵は人間によって魔法で娘を鳥あるいは魚・鹿などにして、自分で取って代わる、その人は概ね妖巫であるか、あるいは継母か、あるいは娘の姉で、鳥は自ら冤罪を鳴いて、また解脱することができて、罪人を法の裁きにかける。新ギリシアの一説では、奴隷が娘を井戸に溺れさせ、化してタウナギとし、奴隷は偽って主婦となり、タウナギを取って殺し、骨を庭に捨てる、すると化してレモンとなり、また伐って薪とするが、木は老僕に語って、株で上下を撃つと、娘は生き返る、これは回生様式の中のエジプトの兄弟の伝説に近似していて、ただ男女の性が入れ替わっているだけだ。

娘を取り易える事も、実例でそれを証明できる。原始の民の婚礼は、夫婦の逢引は、夜明けにならぬうちに別れ、子どもができて初めて相見える、ヨーロッパの田舎でも新婚の夕べには顔も見ないのがある、中国の新婦の絳巾〔嫁入りするときに赤い布で顔を隠す〕も、やはりそのなごりである。童話の中のギリシアの「愛と心」（アプリウスの『変形記』巻四から六に見える）もまた娘が約束を守らず、真夜中火を焚いて夫を伺い、かくて離散となる、いわゆる禁を破る様式は、つまりこの考えによる。これから推測引伸すれば、結婚してすでに久しいのに途中で代わっても、悟られないのは、まさによくある事である。蛇郎が姉が大足であばた面なのを不思議に思うが、姉はしんどい仕事と枕の麻袋のせいでこうなのだと偽るのは、ほとんど後世の誇張である。けだし世説の初めは、宗教族類の関係で、保守に務める、だから変易が少なかった、ところが童話となると、すでに威厳がなくなっており、かつ文化も転変していて、本義が次第にわからなくなる、そうなる概ね潤色を加えることとなり、恣意的に増刪し付会して解釈する、これが童話の分子が雑糅している所以である。

童話で兄弟あるいは姉妹で一緒になって一つの事を成し遂げるのを述べる場合、若いものが常に成功するか、あるいは賢く良いものだけがそうなる、話す者は長兄が先に試みたが、その後も相次いで失敗し、結局は末子になる、故に必ず成功するのだと言う、これはひょっとして行文の法則がそうさせるのかもしれないが、史事に徴すると、別にわけがあるのである。ヨーロッパの中世にはいわゆる末子権というものがあり、法では末子が家を伝えるのである、息子がなければ末女に伝える、イギリスの十三世紀の時にはなお行われており、東方のダッタン諸族にもまたこの制度があった。論者は言う、諸子が成長して、家を出て公民となると、もう家人には勘定されない、それで幼子が業を継ぐ、もし人情として末っ子を愛すれば、それもまたその助けとなつて、この習俗を成したのであろう、いま痕跡の童話に見える者を、人は末女様式（あるいは末子様式）と称し、「蛇郎」もまたその一である。

国民伝説は民歌と格が違うけれども、韻語を混じえるものも多くある、けだし叙述の中で、意味が特に重いものは、とりだして歌吟する、たとえば蛇郎が木樵の娘を欲しがるところ、長姉ではみなダメで、末娘が、^{おとう} 爹は吞吃すべからず、寧ろ蛇郎に嫁ぐべしと言う、これである。このほかにもなお数語があつて、みなその例である、また方言で正字がわからないものもあるが、要の意味があるところは、移し易えてはいけない、注を加えて保存すべきである、これは童話を採録する者の注意すべきところである。

*槃瓠の民 高辛氏の老婦が耳の病にかかり、ほじると繭のようなものが出てきた、そこでそれを瓢の柄杓に入れ槃をかぶせておくと、五色の犬になった、そこで槃瓠と名付けた。のち高辛氏は犬戎の侵入に悩まされ、犬戎の大將後將軍の頭をとってきた者には、万家の町に封じ、末娘を嫁にやるとおふれを出した。槃瓠は呉將軍の頭を啜えて帰ってきた。王はやむなく末娘を嫁にやり、その子孫は栄えた。この話は晋の干宝の『搜神記』十四、『後漢書』八六南蛮伝に見える。

三

又「虎の外祖母」〔外祖母に化けた虎〕と言うのがあり、だいたい次のようである。母に二人の娘があり、ある日家に帰り、それでそこに泊まった。夕方になると虎がやってきて、偽ってお母さんが帰ったよと言い、夜になると一緒に寝て、すぐ幼女を殺して食べた、上の娘は音を聞いて何をしているのと尋ねると、鳥の骨と落雁を食べているところだと言った、娘が食べたいから分けて欲しいと言うと、指一本を投げてよこした、娘は恐れて逃げようとして、偽っておしっこがしたいと言った、すると布団の中でしてしまえと命じた、娘は布団が冷たくなるからとかこつける、すると足で探って娘の帯を引っ張った、娘は帯の端をおまるのふたに結んで、木に上って隠れた、虎は帯を引っ張っても人が見えないので、猿に捕まえてこいと言った、猿は地に落ちて死に、とうとう娘を捕まえることができなかった。（江西の一説では猩々となっているが、猿に娘を捕まえさせる事がない。）

案ずるにこれは食人様式の一例である。ギリシアの史詩ではオデュセウスが円目の民に遇う事をいうが、その事が最も顕著である。異族が相食むのが、野蛮の習俗に基づくのは、人々のともに知るところである、その原因は食が乏しいことによる、あるいは憤懣を雪いで報復するためであるが、又感応魔術によって、その肉を食う者は併せてその力を有すると考え、そのため敢えてそれを食べて、死者の勇気を分かちたいと望むのである、今の日本の習俗で妊娠した者がウサギの肉を食べると子どもが三口になると言う、（『博物志』にもそう言う。）越の習俗でも羊の蹄を食べると足が強くなる、羊の目を食べると目の病が治ると言うのも、この意味である。

童話の中で人を食うのは多くが厲鬼であり、あるいは神が自分でその息子を呑むのだが、今挙げるのは妖巫の類である。上古の時には、人間を供犠として神を祭って、巫覡がその事を司ったので、後になって淫祀は廃されたけれども、伝説は結局残り、遂に食人の悪徳を巫師になすりつけた、（食人の国では、祭りの後巫医會長がお流れにあずかり、それぞれに良い肉を得た。）故に今の妖婆は、実は古の地母の女巫で、ヨーロッパの中世ではなおこの説を信じ、老婆が密かに子どもを食ったと言って、捕えると火炙りにしたのは、童話の言うところと、互いに印証する。ロシアの童話では別にババヤガア（Baba yaga）と言って、鶏の脚の小屋に住んでいる、日本では山姥と言い、また山母とも言う、みな醜い媼だが、人間と変わらない、虎の外祖母はまさにこの類で、ただ奇妙な習俗が人を驚かすので、それで獣の名をつけたのだが、ほとんど原義ではない。越中の一説では野扁婆というのがあり、その意味はわからないが、やはり人類で、毛がある

とは言わない。「虎の外祖母」で娘が火を持って出迎えようとする、虎は止めていないと言、甕の上に坐って、その尻尾を隠す、又寝るときに娘はその毛がもしやもしやするのを怪しむが、虎はふとんだと言いつくするのは、おそらくみな後からつけたもので、前に文飾だと言ったものである。

日本の肥後の天草島にも一説*がある、三人の息子があって、名前を豆太郎・豆次郎・豆三郎と言、山姥がその家に入って、夜に豆三郎をとって喰う。何の音がするのかと訊くと、沢庵漬けを食っているのだと答える、又食い物を求めると、やはり指一本をあたえる、二人は逃げようと思、豆次郎がおしっこがしたいと言、山姥は土間でやれと言、（方言で部屋の中のたたきを言う）、土間の神の怒るのが怖いと言、遂に抜け出し、井戸のほとりの桃の木の上に隠れる、山姥は井戸の水を覗いて影を見、追いかけるが、地面に落ちて死ぬ。その後又落ちたところが蕎麦畑の中で、流血が蕎麦を染めたので、蕎麦の殻は今でもまだ赤いのだと言、これは転じて物原伝説となったものだが、大体を論ずれば虎の外祖母とよく似ていて、孤立して生じたものではないと思われる。山姥の他に、なお山男山女などの名があるが、みな害をしない、人間を喰うのは、ただ妖怪と媼だけである。（北欧の習俗では朝出かけて老婆に逢うのを忌み、もって不祥とする。）

国民伝説は、原始の時には甚だ簡単で、たいていが一つの事に限られる、後にだんだんといろんな様式のが集まって一つとなる、中心は同じ意味だけれども、首尾は合ったり離れたり、極めて変化が激しく、上に挙げた二様式など、ともに人を喰、筋も又近いのだが、一つは物原伝説となり、一つは動物物語となっているのを見てもわかる。虎の外祖母は猿に娘を追わせ、猿は首に縄を巻きつけて、木によじ登る、娘は迫られておしっこを漏らす、猿は熱いと叫び、虎は誤解して縄を引く、（熱い・引くは越音では近い、）猿はそれで縊れ死ぬ、その結果重点は虎と猿の因縁に置かれ、「虎は漏れを恐れる〔ふるやのもり〕」と同じで、これは特に滑稽な趣が多い。

「ふるやのもり」というのは、虎が人家に入り、二人の話を聞く、甲が虎は恐ろしいと言、乙が“もり”はもっと恐ろしいと言。そのとき馬盗人がやってきて、虎を見て馬と間違え、虎に跨ってゆく、虎はそれが“もり”だと思、おおいに怖がる。夜が明けてようやくわかり、盗人は木の上に避ける、虎が猿とともにやってくるが、やはり勝てずに死ぬ。日本の大隅半島の伝説は、これと同じで、ただ主人が虎を見て誤って離れ馬だと思、追いかけて山に入る、破れ寺の中で声がするので、探ると猿の尻尾を掴んだ、力一杯引き抜くと、尾がちぎれた、それで今猿はみな赤い尻をしているのだと言。童話の中で虎と猿はいつも縁があり、「虎の外祖母」では人が虎を演じるのであるが、因襲で“もり”では猿のことが入っているが、それはもともとあったものではないと思われる。

以上述べたのは、ただ一二の越中の童話について、少し解釈を加え、一例とした。伝説の残欠は、徴すべき対象が少なく、ただ一見ただけで断定すると、いい加減になるのは、おそらく免れないだろう。その次に、童話もまた動物物語（だいたい寓言が加わっているが教訓を含むとは限らないもの）笑話（越中に伝わるアホ婿の物語のようなもの）などのスタイルを含むが、ただ

その本事が民俗に基づかないことは、証拠に徴するまでもなく明らかであるから、具には論じない、また世説の如きも、別に考察するはずであるので、やはりここでは言及しない。

*天草の説話 何に依ったのか未詳。

四

人類学の方法によって童話を研究するのは、その用は民俗を探求し、歴史事実を闡明することだが、伝説の本来の意味もまた明らかにしうる、もしさらに文学者歴史学者の言によって童話を研究するならば、文章の起源についても有益なものをうるだろう。けだし童話は（世説を兼ねる）原人の文学であり、茫昧から初めて覚め、自然と接し、たちまち感触を生じ、是非をいうことを恐れ即ち賛嘆となり、もともとこの印象が、発して言葉となり、正であれ乱であれ、あるものは祭典に当たって、それでもって先祖の徳を宣誦し、あるものは間暇に際に、それでもって異聞を話した、女・子どもが楽しみ、楽師が歌うようになって、荘厳と愉楽とちがうけれども、心の声の寄託するところであることは、違いがあるわけではない。外部の情景に臨んで、心中におのずから感応し、つとめて表現を求めて、已む能わざるものがある、これはもとより人類共通のことであり、芸文の真諦もまた即ちここにある、ゆえに文章の源を探求する者は、まさに童話・民歌に解答を求めるべきである。

民歌 (Ballade) というのはけだし童話と同質であるが、ただ韻言なので、歌吟に便利である、その変則には史詩 (Epos) があり、それは世説に童話があるようなもので、四者は類似しているけれども少し違いがある、その間に介在するのが歌伝 (Cante fable) で、歌謡と朗誦とが互いに交わって、(中国に行われる市本〔未詳〕がこれに似ており、又伝奇院本〔伝奇を戯曲化したもの、歌とセリフがある〕の起源もこれと関係があると疑われる、) ほとんど童話の中に、韻語をたくさん入れたもの、あるいは民歌が転変し、散文になりかけだがまだ完成しないものである。史詩や世説は、たいていが篇章が長く、言葉の意味が荘重で、述べるのはおおむね神祇皇帝および古英雄の事蹟である、(また山川城砦などの物語もある。) 上古の王侯長老信じ守るところ(神話学では高級神話と称する、) であるが、民歌や童話はみな簡短で、物事を記し、あつという間で主人公もない、人々はみな喜んで、楽しみ種の種とする、(二級神話と称する、) それが文学では、一つは古の史冊となり、一つは古の詩詞となった、後世の著作は皆これを承けて出たものである。今の文史は、各国の史詩および北方の世説に、議論記録を加えたのである、そしてその余は多分欠けたままになっているのであろう、近世には民歌を証拠として詩の本源を明らかにした者も出た、それは童話においても正に異なるどころはなく、これを小説の胚胎と称しても、至極真つ当であろう。

童話の取材対象はおおむね同一で、山川風土国俗民情の違いによって、それぞれ華麗質朴が自ずから殊なり、それぞれにその花を含み、発して文学となること、またかくの如しで、一々読んでこれを知ることができる。例えばアイルランドの童話は、おおむね美艶幽怪で、想像に富み、

スラヴは陰寒の地において、言うことが迷信に深く染まり、鮮烈恐るべく、南方のイタリア・フランスなどの国が艶冶な思情に富むのとは違う。東方の思想は豊満濃厚そして誇張誕蒙で、叙述はことさらに蔓延を極める、たとえば『千夜一夜』（通俗には『天方夜談』と称する、）の書にはっきりしている。エーゲ海の童話はやはり優美で詩情に富む、マダスカ〔馬達斯加 未詳〕が伝えるところは、特に冗長を極める、蝦夷〔未詳〕・オーストラリア州の諸族は、簡潔でもって優れ、草莽の民〔莽民 具体的に何をいうか未詳〕およびエスキモーは文化が疏散で、近古の石器時代に近く、およそ著述はやはり最も自然に近い。日本の文教は中国の流れを承けているけれども、その民は風物を愛し、美感に富み、洒脱清麗である、そのゆえ童話も賞すべきほどに幽美であり、中国に勝ること、他の芸術と同様である。

童話は太古に作られ、今になって読者はもうその意味するところがわからない、そして野人だけが鑑賞する。それは中国においては、およそ郷曲の居民及び児童たちがまだ喜んで聞く、居る場所は特殊けれども精神はいまだ背かず、それでまるでその趣旨に通じているかのようである。故に童話というのはまた児童の文学とも言う。今の世の学者は多くがそれを用いて教育しようとするが、相談の結果、抑揚未だ定まらず、揚げる者は事の因縁を明らかにして、徳政に役立つ、動植を並べ立て、生の現象を知ることができると言い、抑える者は又荒唐無稽の言は、おそらく迷いや誤りを増長するであろう、もししばらく妄りにこれを言えば、みすみす晦ますことを教えるようなものだと言う。ただ二者の言には正と負があり、童話の本当の意味を、ともに掴んだとは言えない。

けだしおよそ童話で教育しようとする者は、童話は物としては芸術の一つであることを忘れてはならない、その働きの範囲は、他の芸術と並べ論じて断定し、他の教本とは、区別すべきである。故に童話は、その能力は表現にあり、企図するところは享受にある、心霊を驚掴みにして揺るがし、起ち上がって進歩を追求させるのである。そのほかの効果利益は、みな副産物で、本末を失すれば、その意味がわからなくなる。伝奇のようなものがあるが、やはり芸文の一つであり、それが人生を影写するので、そのため仮りて世故を論ずる〔つまり社会劇〕ことができるとし、ある人はそれは伝統文化を発揚するが、それには始めに文徳を具えて、初めて貴いとすることができるのであって、そうでなければただの日常瑣談と違わないとする、けだし道を弁え智を増すのは、未だ文章の能事を尽くすわけではないのであろう。

童話の働きで、教育に見えるものは、児童の想像力を増進養育できて、日に日に豊富になり、感受の力もますます聡くなり、後日よく芸文を鑑賞できるようにすることであり、即ちこれをもって基礎とする、人事の繁華転変は、児童には理解できるものではない、童話の言う社会生活は、おおむねは具わっているが、ただ単純化され、観察の方法も至って簡直であるから、その事を聞けばすぐに人生の大意は了解され、世に出るための資本となる。そして童話には多く神怪、それに自然を超越した不可思議の事に及ぶ、これは児童に静かに深く考えさせ、宗教思想を起こさせる、けだし個体発生は系統発生に順序を同じくする、児童の宗教もやはり原人のようで、精霊信仰に始まり、しだいに自ら推移して、もって神道に至る、あるものは自ら迷執し、あるものは超脱することができ、ただ性格と習慣の差によっておのずからその趨向が定まる。又童話の言

う実物などは、多くが見慣れたものなので、それで児童に教示すれば、多く名と言葉を知るようになり、誦習に便利で、しかも鳥獸草木の事をたくさん述べているので、自然物と親しみ、そして自然の大きくかつ美しいことを知る、これらはみな童話の効用の顕著なものである。

又童話は人・土地・時の三者についてみな制限がなく、かつ撰述者の名前がない、およそ論述するところは、ことごとく客観に基づき、童蒙の心と正に相応じる、知慮がしだいに行き渡るようになると、言葉の中から著者の特性を会得することができるようになる、そこで人為の童話（自然の童話と対になる）ができ、その個性の乏しさを引き受ける、デンマークのアンデルセンが著すものなど、あるいは旧聞を補い、あるいは新たな考えを引き出し、およそ陶冶を経て、みなそれぞれに混成されるが、個性はおのずと存在して、行間に現れる、けだし童話でありながら芳醇な詩と相接しているが故に、貴いのである。

上に述べたところを綜合するなら、童話が理解する価値を持っているのは、それが幼稚時代の文学であって、原人の好むところは、幼児もまた好む、その思想感情は基準を同じくするからである。今教育する者は、児童心理の発達の順序に従うべきで、つまり固有の文学（わらべ歌童話など）によって解らせ、そうすることによってその精神を啓発し、自然に順応して、十分に発達させ、しかるのちに道德・宗教・深淵精密な教えを与え、おのずから体得し、その行くところを選ばせても、遅くはない、もし学習に入る初めに、古臭い言葉や深遠な奥義を六七歳の子どもに課すならば、ただ理解できないばかりか、その聡明な知力が用をなさず、やはり廃止閉塞の状態になり、後日誘導教化してもさらに困難を増すであろう、性に逆らう教育は、今日あるべきものではない。

中国の童話は昔からあり、越中の家ではそれで子どもを楽しませた。郷村の間に特に多く存在するが、ただいままで誰も採集したものがなく、散逸に任せ、近世では俗化が流行し、古風は衰え、年配者はまたそれを言うものが少なく、子どもの方でも従って知るものが少ない、そうこうして行けば、一世ならずして、壊滅してなくなってしまうであろう、収集の仕事こそ、急ぎに急がないではおれようか。グリムの功績、フレーベル（Fröbel）の学説は、世に出てすでに六十年、影響は全世界におよぶが、独り中国だけは取り残されている、またどうして見えることがこんなに遅いのであろうか。

※初出：1913年8月刊『教育部編纂處月刊』第1巻第7期

古童話釈義

中国には昔から童話という類目はなく、近ごろになって初めて商業出版本が流行するようになり、商務印書館の童話第十四篇『ガラスの靴』の発端に云う、“『猫のいない国』は諸君の第一冊目の童話で、六年前にようやく発見され、これより諸君は初めて物語を語る友人と知り合いになれた、『猫のいない国』は中国の最初の童話ということになる、しかし世界で初めての童話にはこの『ガラスの靴』を推さねばならない、四千年前にすでにエジプト国内に出現していたからである”云々と、実はそうではない、中国は古に童話の名こそなかったけれども、実にもとより文章になった童話があったのである、晋唐小説に見られるが、ただ多くはこれを志怪のうちに入っていて、弁別しないだけである。今まずその数例を挙げて、解説を加え、その本来の趣旨を知らしめる、でたらめに作られた言説とは、勿論おのずから別があるのである。童話を使う者は、上は古籍に遺留した物を採り、下は口碑が伝えた物を集め、ついではさらに遠く異文を求め、その欠落を補い、十分満足のいくものにしたいけれども、同時代に望めるものではない。

その一 呉洞

“南人が伝えるには、秦漢の間に洞主の呉氏がいた、土地の人は呉洞と呼んだ、二人の妻を娶り、一人は亡くなって、葉限という娘がいた、小さい頃から賢く、砂金の選り分けがうまく、父は彼女を愛した、いくらも経たないうちに父も卒して、継母に苦しめられ、いつも危険な山に柴刈りに深い井戸に水汲みにやられた。時に一尾の魚を手に入れた、二寸あまりで、赤い背鰭に金色の目、それで密かに桶の水で飼い、日々に成長するので、幾度も器を変えたが、大きくて入れられなくなったので、裏の池に放した、娘は自分が得たものを食べ残してそれを池に沈めて魚を養った。娘が池に来ると、魚は必ず頭を岸にもたげて現わし、他人が来るともう出てこない、その母はそれを知り、いつも伺ったが、魚が出てきたことはない。そこで偽って娘に言った、おまえは何にもしていないのに、わたしはおまえのために新しい着物を作ってやった、と。そこで古いぼろ着物と替えさせ、よその泉に水汲みに行かせた、遠さを計ると数里ばかりである、母は徐にその娘の着物に着替え、よく切れるナイフを袖に忍ばせ、池に行つて魚を呼んだ、魚はすぐに頭を出したので、それをすぐに切り殺した。魚はもう一尺余りになっていた、その肉を料理すると、普通の魚よりも倍も味が良かった、その骨を堆肥の下に埋めた。日を越えて娘は池に行つたが、もう魚は現れなかった、そこで野に哭したところ、たちまち被髪粗衣の人が、天から天下り、娘を慰めていった、もう哭くな、おまえの母が魚を殺したのだ、骨は肥しの下にある、おまえは帰つて魚の骨を取り出し、部屋にしまい、必要なものがあればただ祈るだけでよい、さすればおまえの思い通りになる、と。娘は彼が云うとおりにすると、金玉衣食欲しいと思えば具わつた。洞の祭りになって、母は自分が行くので、娘に庭の木の果実の番をさせた、娘は母が遠くに行つたのを伺い、娘も行つた、翡翠色の上着を着て、金の靴を履いて、ところが母の産んだ娘がそれを認めて、母に言った、あの人は姉さんによく似ている、と。母も疑つたので、娘は悟つ

て、速やかに帰った、それで靴の片方を残したのが、洞人に拾われた。母は帰ったが、娘が庭の木を抱いて眠っているのを見たので、もう気にしなかった。その洞は隣に島があった、島には陀汗と云う国があった、兵は強く、数十の島、数千里の海域に王として君臨した、洞人はその靴を陀汗国に売った。国主が靴を得て、その左右に履かせてみた、足の小さな者は靴よりも一寸小さく、そこで国中の婦人にそれを履かせてみたが、ついに一人としてぴったりな者はいなかった。その軽きことは毛のようで、石を踏んでも音もしない。陀汗王はその洞人が非道によってそれを手に入れたと思って、そこで禁錮して拷問にかけたが、ついにその由来は分からなかった、そこでその靴を道端に捨て、すぐに人家を風潰しに探し回って捉えようとした、女物の靴を持っている者があったので、これを捉えて報告した。陀汗王はそれを怪しんで、その部屋を探させたところ、葉限を得て、それを履かせてみるとぴたりと合った。葉限はそこで翡翠色の着物を着て、靴を履いて入ってきたが、それはまるで天女のものであった。はじめて具に王に告げると、魚の骨と葉限とを車に乗せて国に帰し、その母及び娘はすぐに石投げの刑で撃ち殺された、洞人はそれを哀れんで、石の穴に埋め、懊女塚と名づけた、洞人が祭りをやり、娘に求めると必ず応険があった。陀汗王は国に帰ると、葉限を上位の妻とした。一年が過ぎ、王はむやみに魚の骨に求めたところ、宝玉は無限であったが、年を越すともう応じなくなり、王はそこで魚の骨を海岸に埋葬し、真珠百斛を使ってそれをしまい、金をもって標とした。征伐の軍が謀反を起こしたので、それを発いて軍を慰撫しようとしたところ、一夕海潮のために沈んでしまった。成式の本の家人李士元の云うところである、士元はもと邕州洞中の人、たくさん南中の怪事を覚えている。”

案ずるに右の『支諾皋』〔段成式『酉陽雜俎』の一章〕に載せるものⁱは、世界の童話の中では灰かぶりの様式に属する。商業出版本の『ガラスの靴』がすなわちその一種で、^{シンデレラ}辛特利とは訳して灰かぶりと言う、いま葉限という名前の意味はわからないけれども、その本末は一致する。中国の童話はこれをもって最も早いものとすべきである。エジプトの伝説でいまに存する者は八篇だが、この事は見えない、二世紀の時にアイリアノスが史書を著しⁱⁱ、その中でギリシアの妓ロドピスが川の中で水浴みして、その履き物を鷹にさらわれ、エジプト王の懷中に墜ち、物色して彼女を王妃にしたというのとやや似ている。今の世に流伝している本は始めてフランス人ペローが記録したもので、十七世紀の時であった、故に柯古のこの篇は最初の歌い出しとして推奨すべきである。

この類の童話の中では、常に陰ながら娘の助けとなる物がある、たとえば牛馬鳥蛇など、いまは一匹の魚である。荒蛮の伝説では、その物はすなわち娘の母である、あるいは母の死後に化したもの、あるいは墓の上の物である、けだし太初の信仰では、物・我は同一視され、異類が対となるのは、常にその説が見られる、靈魂は不滅で、形を変えて復活するので、先の原因となったことをよく知っており、その後世を助ける、これが第二の説の基づくところである。文化がようやく進むと、異聞によって俗を驚かした、そのために内容を刪改した、たとえばドイツの灰かぶりの中で、娘が母の墓の木の上の白鳩の助けによって、いろいろの衣服装飾を手に入れる、フランスではそれが娘の教母〔洗礼式の立会人〕、すなわち神女である。『ガラスの靴』はその説に

基づくがプロットが中断するのは、唐突の感を覚える、呉洞の魚は母の化したもののはずで、継母が工夫を凝らして娘を謀殺しようとするのを見たことは明らかである、でなければトーテムの意力をもって死者と神秘的関係があったのかもしれない、しかし原本ではここが欠けている、ほとんど前に伝聞の異詞があった故なのかもしれない。

履き物をとって娘を求めるのは、各本は同じである、その履き物はあるばあいは絹、あるばあいは金、あるばあいはガラスであり、また金環あるいは一筋の髪の毛を証拠として、搜索して娘を手に入れる場合もある。感応魔術には一部分によって全体に及ぼす方法がある、およそ人の何か一つの物を手に入れた者が、たちまちその人の体全体を手に入れる、故にこの様式が生まれた、又その髪は色の美しさを表わし、その腕環あるいは履き物は、手足の美しさを表す、初めは異様なところはないが、エジプト王が履き物を手に入れ、その主を探させて言う、履き物の主はきっと美しい婦人にちがいない、この美しい足をもっているからだ、と。呉洞は娘を探したこと及び洞人を禁錮拷問したこと、又魚の骨に折ったことなどを述べる、事がやや繁雑詳細である、けだし伝説が交錯し、純粹の童話でなく、当然その土地の世説に繋がっているはずで、段柯古がそれを雑述したのであろう。

ⁱ シンデレラと『酉陽雜俎』の「呉洞」とを結びつけて論じたのは、中国では周作人のこの文章が初めてである。この文章の直前に南方熊楠の「西暦九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」が発表されている。明治四十四年（1911）三月『東京人類学会雑誌』二十六卷三〇〇号。周作人がこれを見ていた可能性は大いにあるが、叙述の仕方は大いに違う。

ⁱⁱ アイリアノスの史書 未詳。原文は埃利阿諾。南方の前の論文にはその出典を示して次のようにある。「履を手懸りとして美女を求むる談は、ストラボン（耶蘇とほとんど同時）の書に出づ。西暦紀元前六百年ごろの名妓ロドペ浴する間に、驚その履を掴み去り、メムフィスの王の前に落とせしを、王拾って、その履の美にして小さきに惚れ込み、履主を搜索して、ついにロドペを娶れりとなり。」ストラボンの書とは『地理誌』を言う。（日本語訳には『ギリシア・ローマ世界地誌』全二巻、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994年7月がある。）周作人が言うアイリアノスは二世紀の人と言うから、別にそのことを述べた書があるはずである。南方はそのことを述べていないから、周作人はおそらく別の資料に基づいたのであろう。あるいは二世紀のアテナイオスの『食卓の賢人たち』を言うものか。

その二 ^{ほうい} 旁缶

“新羅の国に第一の貴族金哥がいた、その遠祖の名は旁缶。弟が一人あり、甚だ家財に富んでいた、その兄の旁缶は別れて住んでおり、衣食を乞うた。国の人に空き地を一畝ばかり与える者があった、そこで兄は弟に蚕と穀物の種をくれと言ったが、弟は蒸して与えた、缶はそれを知らなかった。蚕の時になって、一匹の蚕が生まれた、日に一寸余り成長し、旬日のうちに牛ほどの大きさになった、数本の木の葉っぱでは間に合わなくなった、弟はそれを知り、隙をうかがって

その蚕を殺した。一日が経つと、四方百里以内の蚕がその家に飛集した、国の人をそれを巨蚕と言った、意味はそれらの蚕の王だということである、四隣の人と一緒にあってそれを繰っても尽きる事がなかった。穀物はただ一本だけが植えられ、その穂は一尺余りに成長した、旁缶はそれを守った、突然鳥が折って啄んで行った、旁缶はそれを追いかけた、五、六里も山に登った、鳥は石の隙間に入り、日が沈んで、道は暗くなった、旁缶はそれで石のそばに止まった。夜半に月が明るくなると、赤い着物を着たひと群れの子どもがみんなで遊んでいるのが見えた、一人の子どもが、お前は何が要るのかというと、一人は酒が欲しいと言った。子どもは金の錐を取り出すと石を打った、すると酒と酒樽などが揃って出てきた。一人が食べ物が欲しいというと、またそれを打った、すると餅やあつもの炙りものなどが石の上にはずらっと並んだ。やがて、飲食が終わるとみんな散ってしまい、金の錐が石の隙間に差し込んだままになっていた。旁缶は大喜びで、その錐を取って帰り、欲しいものがあれば打つと出てきた、それで国の力と同じほどに富んで、いつも宝玉を弟に贈った。弟はようやく以前欺いた蚕と穀物の事を悔いたが、相変わらず旁缶が穀物でわしを欺いたのだ、わしがもし兄のように金の錐を手に入れたらなあと言っていた。旁缶はその愚を知り、諭したが及ばず、そこで言うままにさせておいた。弟が蚕を飼うと、一匹しか孵らず、普通の蚕のようであった。穀物を蒔くと、また一本で、それを植え、熟しかけると、やはり鳥が銜えて行った、弟は大喜びで、それについて山に入った、鳥の入ったところにゆくと、鬼どもにあうと怒ってこいつは俺たちの金の錐を盗んだやつだと言った。そこで捉えて、お前は俺らのために糠で板三枚の高さの土手を築くか、それともお前の鼻を一丈ほどに伸ばして欲しいかと言った。弟は糠で板三枚の土手を築く方にしてくれと頼んだ、三日疲労困憊になったが築けず、鬼に哀れを乞うた、そこでその鼻を引っ張られ、鼻は象のようになって帰った。国の人をそれを怪しんで寄り集まってそれを見た、いやというほど恥をかいて亡くなった。その後、子孫が戯れに錐を打って狼の糞を求めたところ、雷が鳴り響き、錐は所在を失った。”

右もやはり『支諾皋』に載っている、この類の童話は多くが一つの型から出る、大抵は一人が利を得て、他の人がそれについて真似をするが、失敗に至る、すこぶる滑稽な趣を持っている。日本の童話に『舌切り雀』があり、翁と媪とが一羽のスズメを飼っている、ある日スズメが洗い張りの糊を食べたので、媪はスズメの舌を切ってしまった、翁が帰ってきて行方を尋ね、スズメの宿にゆくと、大いに歓待され、別れに臨んで葛籠を贈られる、翁はその軽い方を選んだが、中はみな財宝であった、媪は羨ましがってやはり尋ねて行って、重い方を背負って帰り、途中で葛籠を開けると、妖魔がことごとく出てきて、びっくりして逃げ帰り、それからは行いを改め善をなした。このほかにも又『花咲か爺さん』及び『瘤とり』がありともによく似ているが、なかでも『瘤とり』一篇はとくに絶妙である。ある翁が瘤を病んでいた、山に入って柴を刈っていると、大風雨にあった、木のほらで雨宿りをしていると、雨が止んで突然人の声が聞こえた、鬼が酒宴をしているのであった、翁は見つけられ、翁は出て行って舞を舞うと、鬼は大喜びで、次の日もまた来いと命じ、その瘤を取って形とした。隣の翁にも瘤があった、明る日行って舞ったが

あまりに下手であったので、鬼は怒って、瘤をその頬に加え、そうして二つの瘤をつけて帰った。旁征の弟の鼻が一丈伸びたのと、ともに面白い趣向で、よく似ている。

越中の童話にもまた『スズメの折れ足』という一篇がある、ある媪がスズメが足を折って地面に落ちるのを見て、養生してやって治ると放してやった、スズメはかぼちゃの種を一粒銜えて持ってきた、媪がそれを蒔き、ひとつ実がなった、それを割いてみるとみな黄金であった。隣の媪がスズメの足を折って、やはり養生して、スズメは瓜の種をお礼にし、やはり一つ実がなった、割くと中は糞や穢いものであった。まるで善を褒め悪をこらす思想のようであるが、思うに東亜は仏教の影響を受けており、そのため他所よりも特に多いのである、環を銜えたり真珠を贈るとかの類は、いろいろな伝記に見える。ヨーロッパにもこの式の童話がある、たいていは末女様式の中に用いられ、翁媪が主人公になるものが少ないのは、あるいはまた思想の違いによるものか、東方はもとより多くが消極に傾くためか。

旁征の金の錐は民俗の中に習見され、中国の如意聚宝盆は、まさにその著しい例である。子どもの頃聞いた童話に、石臼の中に物を投げ込むと、一晚越すと一杯になる、ある晩隣の奥さんが誤って鶏籠を臼の上に置いて、糞が中に落ち、次の日臼は鶏の糞でいっぱいになり、その後とうとう験がなくなったというのがあった。各国の伝説は、あるいは机、あるいは碾き臼、あるいは箱とさまざまだが、おおむね随意に物が取れ、使っても尽きない、けだし原人が求めたものは衣食が第一であったが、なかなか得やすくなかったので、自然とこんな思想が生まれたのであろう。日本の福の神大黒天が手に小槌を持っているのは、まさに金の錐の類である、また狂言『鬼の槌』にも、鬼が隠れ蓑と小槌を持っていて、思いのままに酒食を求めることができたと言う。

その三 女スズメ

“姑獲鳥は、夜に飛び昼は隠れている、けだし鬼車の類であろう。毛を着ると飛鳥となり、毛を脱ぐと女人となる。名付けて天帝の少女という、一名夜行遊女、一名鉤星、一名隠飛鳥。息子がいないので、好んで人の子を取って養い息子とする、人が子どもを育てるのにその着物を夜露に晒してはいけない、この鳥は狙いをつければすぐ子を取るのである、その着物に血をつけておいて印とする、ゆえに世人は鬼鳥と名づける。むかし豫章の男が田んぼの中に六七人の女人を見つけた、しぜん鳥とは知らず、腹ばいになって行き、まずそれが脱いだ毛の衣を得てそれを隠し、すぐに諸鳥のところに行った、諸鳥はそれぞれ毛の着物のところに走って、それを着て飛び去ったが、一羽だけ去ることができず、男はそれをとらまえ妻として、三人の娘を産んだ。その母はのちに娘に父に尋ねさせ、着物が稲藁の山の下にあるのを知り、着物を取って飛び去った、のち着物をもって三人の娘を迎え、三人の娘も着物を得て、やはり飛び去った。”

右は郭氏『玄中記』に見える、『太平御覧』の引く『搜神記』も同じである、ただし豫章新喻県とする、又『水経注』に『玄中記』を引き、陽新の男が渚で女スズメをつかまえ、遂に共に住んで、二人の娘を産んだが、みんな羽衣を着て行ってしまった、と云う。日本の『近江風土記』

には、近江の男伊香刀美が八人の天女が川で水浴みをしているのを見て、ひそかに羽衣一枚を取って隠した、女は遂に留まって夫婦となったが、のちに衣を見つけて飛び去ったことを載せている*。ヨーロッパには『白鳥の女』伝説があり、おおむね同じである。その根本思想はすなわち精霊信仰及び感応魔術から出る、けだし形は違うが精神は通じる、ゆえに人と獣は接することができる、着物が人の手に入ると人の所へ行って一緒に住む。あるいは古人は多く怪鳥を信じた、それでこういう思想が生まれたのだ、上に述べた姑獲鳥の信仰を見てもわかると云う人もある、しかしこうした伝説は鳥類に限らない、多く走獸魚介が人に化すのは、たいていもとは同じ考えから出る、ただ風土風習の違いによって、変化が生じ、山に居る者は鳥と言ひ、水に居る者は魚と言ひ、それぞれ見るものについて言っただけのことである。かつ『玄中記』の鬼鳥をよく調べるとどうも別の事らしい、ほとんど毛を着ると飛鳥となり、毛を脱ぐと女人となると云う二語によって、引きずられて言っただけのらう。いま紹興でも小児の着物が夜露に濡れることを忌んで、九頭鳥が首の血を着物に垂らすと、子どもを夭折させると云うが、つまりその着物に血をつけておいて印とすると云うのがそれである。日本でも子どもに夜泣きさせると云うが、ただ何鳥かは言わないから、思うに鬼鳥と豫州の女スズメとは必ずしも関係しないらう。

越中には又『田螺娘』の伝説があり、農民が田螺を甕の中で飼っていて、いつも田んぼから帰ると、食事がきちんと揃っているのに、怪しんで伺っていると、娘が甕から出てきて、掃除や食事の用意をする、見られてしまったので、とうとう留まって去らなかつたと云う、いまのわらべ歌にもまだ“ぼくぼくぼく、おまえの母ちゃんた一に一し〔のカラ〕と云う句がある、これはつまり貝類が人間になった場合である。この類の童話は、初め人間の力で一緒になるのだが、実は無限の勢力がひそかにその背後を伺っているのである、たとえば着物を失えば女は留まるが、着物を手に入れば女は去る。けだし民俗学の中のタブーは、その規律は宗教に基づき、約束を立てるが、次第に破られ、中国には破法という説があるが、これなどほとんどその一例であらうか。

このほかなお馬頭娘、槃瓠、それに劉・阮の天台・腐った斧の柄の諸事があり、みな世説の範圍に属するので、今は言及しない。童話の種類及び教育との関係については、『童話略論』の諸篇で調べることができる。

※初出：1914年4月20日『紹興縣教育會月刊』第7號

*白鳥伝説 『近江風土記』は逸して古書に引かれた断片しか見ることはできないが、その中の余呉湖の伝説は『帝王編年紀』に引くものが残っている。

古老傳曰 近江國伊香郡 與胡郷 伊香小江 在郷南也 天之八女 俱爲白鳥 自天而降 浴於江之南津 于時 伊香刀美 在於西山 遙見白鳥 其形奇異 因疑若是神人乎 往見之 實是神人也 於是 伊香刀美 卽生感愛 不得還去 竊遣白犬 盜取天羽衣 得隱弟衣 天女乃知 其兄七人 飛昇天上 其弟一人 不得飛去 天路永塞 卽爲地民 天女浴浦 今謂神浦是也 伊香刀

美 與天女弟女 共爲室家 居於此處 遂生男女 男二女二 兄名意美志留 弟名那志登美 女
伊是理比咩 次名奈是理比賣 此伊香連等之先祖是也 後 母即搜天羽衣 着而昇天 伊香刀
美 獨守空床 唸詠不斷

古老の伝に曰く、近江の国伊香の郡、与胡の郷、伊香の小江は、郷の南に在り。天の八女、俱に白鳥と爲り、天より降りて、江の南津に浴みず、時に、伊香刀美、西山に在りて、遙かに白鳥を見、その形奇異なり、因りて是の若きは神人かと疑いき、往きて之を見るに、實に是れ神人なり。是に於いて、伊香刀美、即ち感愛を生じ、得ずして還り去る、窃かに白犬を遣りて、天の羽衣を盗み取り、弟の衣を隠し得たり。天女乃ち知り、その兄七人、天上に飛昇す。その弟一人、飛び去るを得ず。天路永く塞ぎ、即ち地の民となる。天女の浴みし浦は、今神浦と謂う是也。伊香刀美、天女の弟女と、共に室家を爲し、此處に居り、遂に男女を生む、男二女二、兄の名は意美志留、弟の名は那志登美、女は伊是理比咩、次の名は奈是理比賣、此れ伊香の連等の先祖是也。後、母即ち天の羽衣を搜し、着て天に昇り、伊香刀美は、独り空床を守り、唸詠して断えず。

わらべ歌の研究

わらべ歌というのは、児童の歌う歌の言葉であり、古は童謡と言った。『爾雅』に、“徒歌を謡と曰う”とあり、『説文』の、𠂔字の注ⁱに、“肉と言に従う、糸竹相和するなきの歌詞を謂う也”とある。ただ中国は昔から童謡を讖緯〔予言〕になぞらえた、『左伝』莊公五年の杜預の注に、“七、八歳の子どもは、他人のことを考えるなどという感覚はなくて、遊びの言葉を作ることができる、それは何か根拠になる物があるようにも思われるし、その言葉はあるいは当たったりそうでなかったりする、博覧の士、考え深い人は、それをも合わせて覚えておき、戒めとし、将来の験ともするので、世の風教に利益がある”と云う。又童謡の起原を論じて、『晋書・天文志』に、“およそ五星盈縮して位を失えば、その精地に降りて人となり、熒惑〔火星〕降りて童児となる、歌謡遊戯して、吉凶の応、その衆に随て告ぐ”とある。又『魏書・崔浩伝』に、“太史奏す、熒惑の瓠瓜星の中に在るに、一夜忽然として亡失して、所在を知らず、あるいは謂う下りて危亡の国に入り、將に童謡妖言をなさんとすと”とある。『晋書・五行志』はなおそのうえ事を記してこれを実証している。（熒惑を童謡の主とするのは、けだし望文生義であろう、論理学のいわゆる“丐詞”^{かいし}である。ⁱⁱ）由来書史の童謡を記録する者は、おおむねこの意味で、多くがこれを五行妖異の中に並べる。けだし中国では童謡を子どもの歌とは考えず、鬼神の馮托、つまり呪いの言葉のように考えているが、その来歴は遠いのである。

占いの童謡は、実はまたわらべ歌の一種でもある、ただその言葉歌詠は、みな一頃の事実にあつて、自然の流露で、ひろく物情を詠じたものではない、学者はこれを歴史のわらべ歌と称する。日本の中根淑は『歌謡字数考』ⁱⁱⁱを著し、子守歌のほか別に童謡の一門を立て、その解釈に云う、“支那の周の宣王の時の童女の歌に、檠弧箕服、実に周国を亡ぼす、とあるは、童謡の起原で、我が国では『日本紀』の皇極紀に載せる歌が最古で、次は斉明天智等の紀、及び後世の記録の中に見える。その歌はみな当時の事実を詠じ、興を他物に寄せて、その言葉の意味をくらし、後世の人間には理解できるものが少ない。ゆえに童謡というのは、ほとんどその時代の心ある人の作で、世に流行し、馴染んで童子が歌うものになったのである。”中国の童謡もまたそうである。わらべ歌の起原にはほぼ二つある、あるものはその歌詞が児童自らが作ったもの、あるものは大人が作ったものにもとづいて、児童がそれを歌ったものである。古の童謡などは、つまり後者に属し、それが史実と関係するものであるから、伝につけられて今日に至ることができたわけで、普通の歌と共に消滅しなかったのである。

だいたい子どもは生まれて半年もすると聴覚が発達して、よく声音を聞き分ける、韻を持つものやリズムがある音を聞くと、とても愉快に感じる。子どもははじめて言葉を学ぶのに、字句はなさないが、自ずと調子があり、言葉が言えるようになると、常に歌詞を繰り返し、自ずと誦することができるようになって、普通の言葉よりやさしい。けだしわらべ歌で言語を学ぶには、音節が先で言葉の意味は後である、これがわらべ歌のよって起こる点であり、それが幼稚教育の上で重要な所以であるのも、まさにここにある。西方の学者が、搜集研究し、排列して書物とする

には、児童の自然な発達の順序に従い、順を追って進み、童話と接合する。大要は前後二段に分かれる、一つは母歌と言ひ、一つは児戯と言う。母歌とは、子どもがまだ喋れず、母が子と戯れるのに、母が歌を歌ってこれを助ける、後の子どもの自戯自歌とは違ふ。その最も初めのものは子どもを撫でて眠らせるための歌で、ゆっくりした音で歌詞を作り、反復重言する、聞く者は体をほぐし、自然と眠りに入る。各国の歌を見るに、言葉の意味はさまざまではあるけれども、わかりやすい言葉で単調である点で、一つの鑄型から出たように見える、南フランスの歌にただ睡れ睡れと言うばかりで、他の言葉は言わない、そして藁屋根の灯火の下で、ゆっくりとこれを歌う、揺籠の音と和して、人に自然と眠気を生じさせる。越中の子なで歌のごときも、やはりただいい子いい子〔^{バオバオロウロウ}宝宝肉肉〕の数言だけで、この時さらにもしゆっくりした紡ぎ車の音と和すなら、正に〔南フランスの子守唄と〕妍を競うだろう。次は弄児〔子どもの体をいじる〕の歌である。まず児童自身の体について、指さして歌ひ、だんだんと体以外の物に及ぶ。北京に十指五官および足指の歌がある、(アメリカのヘドランド〔何徳蘭〕編訳『わらべ歌の図』〔『孺子歌図』〕に見える、)越中では子どもの手を取り、人差し指をチョンと合わせ、歌って言う、

“ちよんちよん^{ムシ}虫、ムシムシ飛んだ
どこまで飛んだ？
高い山飛んで白い米食べた、
むしゃむしゃと！

日本の“ちょちちょち”(Chochi Chochi)、イギリスの“パテ”(Pate Cake)もみなその一例であり、その他の指戯もみなこれに属する。又“つぶつぶカワニナ”、“水車がゴットン”、“×××ばあちゃん家に”、“蕎麦の取り入れ”などもそうである。又次は物の歌で、おおむね天然現象について、即興で情を賦す、越の“鳩鳴き燕語る”、“蟬がジージー鳴く”、“ホタル夜毎に赤い”など。杭州にもこれがある、

“ホタル、ホタル、ちろちろ飛ぶ、
上がったり、下がったり。”

あるいは“ほたるほたる、わたしを照らせ！”と言うのは、甚だ詩趣がある。北京の歌にも“カササギ、カササギ、豆腐買った”、“ちっちゃなネズミ油皿にのぼる”があり、『北齊書』に童謡“ひつじよひつじ野の草をはめ”を引き、『隋書』の“かわいそうな青雀の子”、又“きつねが尻尾切る”、『新唐書』の“つばめつばめ天に飛ぶ”は、みなその選にはいるものである^{iv}。また次は、人事の歌である。もともと世情にもとづき、特にゴタゴタした趣のが多い、この類は初めは母の歌であるが、子どもが話せるようになると、次第にこれを歌う、そうなる流れで児戯の歌となる、越中の“クモの巣”、“三日月お月さん”、“サンザシぶらぶら”はこれである。^v

児戯とは、児童が自分で遊んで自分で歌う歌詞である。しかし児童は母の歌うのを聴きそれを知ると、また自分でそれを歌う。おおむね三つに分かれる、遊戯、なぞなぞ、叙事である。児童の遊戯は、歌があつてそれを先にする、場合によっては和する者があるのは、先の弄児の歌と似ているが、一つは能動的で、一つは被動なのが違ふ。『北齊書』に、“童戯というのは好んで両

手に縄を持って、地を払うと飛び上がり、かつ唱って言う、高いなあ！”、つまり近世の縄跳びである。又『旧唐書』に、“元和の小児の歌謡に云う、麦うち麦うち三三三、ぐるっと回って、舞い終わり！”と云う^{vi}。『明詩綜』に、“正統年間に京師の群児が手を繋いで道に叫んで云った、正月にや、狼が来て豚を咬むか？一児が応じて、まあだだよ。どんどん経って八月になったら。応じて云う、来たぞ！皆んなばらばらっと逃げた。”みな古歌のわずかに存するものである。いま北方ではまだ大鋸それ引け（拉大鋸）、翻餅烙餅、臼引き（碾磨）、犬の肉煮えた（糊狗肉）、点牛眼、敦老米などの遊戯^{iv}があって、みな歌でそれを助ける。越中にはかなりの遊戯があるけれども、その歌詞を失くしたので、散佚しやすく、かつ遊戯に面白みを少なくしている。

越中では子どもが輪になって坐り、一人が立って歌を歌い、順番に最後の字になると、当たった人がすぐ立って前のに代わる、歌に云う、^{vii}

“鉄脚斑斑、斑過南山、
南山里曲、里曲弯弯、
新官ご着任、旧官おなごり惜しゅう！”

これはもともと鬼決め歌〔決択歌〕であるが、すでにその意味を失って普通の遊戯になったものである。およそ競争遊戯は、相手になる一人が必要で、つまり歌でもって別のものを選び、最後の字が当たったものを決める、その歌詞はおおむね晦渋で分かりにくく、たいていが韻によってなっている。『明詩綜』に童謡を記して云う、“猩猩斑斑、跳過南山、南山北斗、獵回界口、界口北面、二十弓箭。”朱竹垞の『靜志居詩話』に云う、“これはわたしが子どもの頃閭巷の子どもと手を繋いで足踏みをし歌ったもので、どういう意味か不詳で、また証となるものもない。”『古今風謡』を見てみると、“元の至正年間に燕京の童謡に、脚驢斑斑、脚踏南山、南山北斗、養活家狗、家狗磨面、三十弓箭。”とある。実は同一の歌詞が転訛したものである。けだしわらべ歌は音節を重んじるので、多くは韻に従って接合し、意味は一貫しない、たとえば“一つ星”、および“天の中の一つ星木の中の鷹一羽”、“雨まじり雪まじりすっぽんを凍殺す”など、みなそうである、児童がこれを聞き、ただ一二の名と物について、連想して面白がり、自ずから楽しみを感じて、筋が通ることを求めない、童謡が難解なのは、多くはこのためである。ただ古代の礼俗にもとづき、流伝して今に及ぶものは、民俗学によって道理がつけられ、その本当の意味を得ることができる。

なぞなぞは、古のいわゆる隠〔あてもの〕であって、“竹を断り竹を續ぐ”の謡が、たぶん最も古いであろう。いまの荒蛮の民族はなお多くこれを好む、ヨーロッパ・アジアの列国でも、農民の婦人子どもにも、やはりまだなぞなぞの流伝があり、その内容はよく似たようなものである。フィリピンの土着民の釣り針のなぞは、“死肉を懸けて、生肉を求む”、と“竹を断ち竹を續ぎ、土を飛ばして肉を逐う”が弾丸を隠喩しているのと同じ考えの筋道である。又犬の謎に、“坐るときは体は高く立つときは低い”と云うのは、紹興のなぞと同じである。近人の著『榊尊室談虎』に云う、“子どもの頃喜んで日用の物でなぞを作った、それが身近で射て易かったが、村の傭や子どもの牧人には常に伝述の作があり、互いに自慢し合い、言葉は下品であるが、やは

り間々取るべきものがある。”だがやはり例を挙げない。越中のなぞなぞの優れたものは、たとえば稲には云う、

“一園の竹、簇簇〔ほろほろ〕として細やかに、
白い花を開き、蓮の肉を結ぶ。”

蜘蛛には云う、

“空に網一つ、
網にカニ一匹。”

眼には云う、

“昼間は忙し、
夜は藁が屋根を覆う。”

みな物を理解して微に入り、考えはすぐれて巧みである。幼児の知識が初めて開けると、隠れた物を探し求めるが、これはその考えを発展させるに足る、かつ述べる対象はみな見慣れた事物で、その形状をなぞり整理して、切実に明らかにするのは、幼稚な時代には、天然物の解説であるばかりか、その効果利益を言うならば、ほとんど近世に提唱される自然研究にも匹敵するのではないか。

叙事歌の中には歴史に根付いたものがあり、上に述べた史伝に載せられた童謡などは、多くがこれに属する。その初めは世人によって作られ、風諭が込められる、ところが小児が歌い、時代が変わると、あるものは残るがあるものは滅び、淘汰の結果残ったものは、永く流伝する、越中の歌謡の“ディーバディーバ〔嫁入り行列のラッパの音〕、花嫁はここに止めよ”などは、范嘯風が〔『越諺』で〕宋末元初の歌謡だとするのは、その一例である。だがやはり分別して言うべきである、およそ占いの歌は、全部が全部信用がおけるものではない、“千里草なんぞ青々たる”の董卓を歌ったもの、“小兒天上口”の呉元済を歌ったもの^Ⅳは、明らかに作られたもので、もともと童謡ではない、又“燕燕尾は涎涎〔つやつや〕”^Ⅴなどはもとは童謡であったが、後人がその事に付会したのである、みな篝火狐鳴の故智であって、よって正解とすることはできない。ゆえに叙事の童謡は、事後の詠嘆の詞であって、讖緯とは別である。次に伝説の歌がある、神話世説をもとにするが、ただ中国にはもともと神話が少なく、この類はおのずと少ない。越中の“ばくばくばく”歌は、その本事は田螺娘伝説から出るが、他にはまだ見ない。又次は人事の歌である、その数は最も多い、およそ人間世界の事例は、大抵備わっている、ただ単純化しているゆえに童心に背かない。婚姻の事など、児童の歌謡・遊戯の中ではしばしば見られて少なくな、言葉の趣が朴直で、妙は自然さにある。北京の謠に云う、

“軒のコウモリ、花靴履いて、
お前は婆さん俺じさま。”

英国の歌に云う、

“白は百合の花 赤いバラ、
わたしが王になったなら、
お前は妃、

霞む青い花、草は緑に、
お前がわたしを思うなら、
わたしもお前を思うだろ。”

みなその良いものである。淫佚の言葉は、田舎の歌で、童謡の本色ではない。『天籟』^x巻一に載せる、“柘榴の花開いて葉は稀なり”、又“姉さんお部屋でニーコニコ”などはみなこれである。けだし童謡は俗歌ともと同源で枝分かれたものであり、児童は性質としてまねを好み、俗歌を誦習して、しだいに錯雑するが、その感情の句調を見れば、自ずから識別できる。“柘榴の花咲いて葉は稀なり、姐さん着飾ってお里は喜ぶ”は、もとより世俗山歌のしらべである、けだし童謡の中には間々俚詞があるけれども、決して淫らな思いはない。

古今の童謡の良いものは、味わい深く意味深く、芳醇な詩のようなどころがある。北京のわらべ歌に云う^{xi}、

“秋風がひとしきり涼しさもひとしきり、
白露が一回霜が一回、
厳しい霜と一騎打ち根も一本の草一本、
バッタは死んで草の根に。”

あたかも原人の歌の如くである。『隋書』の童謡に云う^{xii}、

“青驄の馬に乗る黄色の斑、
発するに寿陽のみぎわ、
来る時は冬気の末、
去る日は春風の始め。”

詩三百篇の名残りがあふ。ゆえに民俗学によってわらべ歌と民歌を比較して、詩の起源と、芸術が人生と相渉るとはどうかを探ることができる、それは童話から小説の原始を知るようなもので、文学史家の廃さない所以である。『玉台新詠』『樂府詩集』に多くが採録される、漢代の「大麦の謡」「城上の鳥」は最もすぐれ、宋長白の盛んに褒めるのは*、たぶん樂府と同じだからなのだろう。教育方面では、わらべ歌が幼児教育の利益と特に切近している。ドイツ人フレーベルが自力活動の説を唱えて以来、世を挙げてこれを宗とする。幼稚教育は務めて自然に順応し、その発達を助けることにあり、歌謡遊戯はその主な課目であり、わらべ歌の曲がりくねった分かりにくさ、童話の荒唐無稽さには、みな取るところがある、その時の小児の心も、またそのように曲がりくねって分かりにくく、またそのように荒唐無稽であるから、二者は正に適合しているのである、達雅の言葉、正しい意味は、かえって受け入れるところではない。これから言えば、わらべ歌の作用もまた、児童の心身の発達の程度に応じて、その音を好み言葉を多く語る性質を満足させるものでなければならない。童話・遊戯もその主旨はこれに準ずる。級次がようやく進み、知慮がようやく全面的になると、児童の心は、おのずから歌の曲がりくねった分かりにくさ、話の荒唐無稽に厭き、さらに上のものを求めるようになる、その時に達雅の言葉、正しい意味を進めるならば、石を水に投げるように、難なく受け入れられる、他でもない、やはりその自然の機に従うだけのことである。いま人は多く幼稚教育を言うが、いたずらに空言するの

みで、実際がない、幼稚教育の資料も、なお欠乏していて、坊間で作るわらべ歌・童話は、又荒謬で使うことはできない。ゆえにわらべ歌の性質を略論して、教育研究者のための一助とする。

※初出：1914年1月20日『紹興縣教育會月刊』第4號

ⁱ 『説文解字』「𦉰」字の注 大徐本も小徐本も「徒歌なり、言と肉に従う」とするだけで、「謂無糸竹相和之歌詞也」と言う一句はない。段注は「言に従う肉の声」と訂正する。周作人がどういうテキストに依ったのか、今のところ未詳。

ⁱⁱ 「丐詞」 嚴復は『ミューラーの名学』の中で、“予期される理由”を定義して“丐詞”とする。“先に定義を臆造し、それからその言うところについて望文生義する”こととする。

“fallacy of begging the questions”当然と思うことの誤りとでも言うか、“丐問智詞”の略文ではないかと思われる。

ⁱⁱⁱ 中根淑『歌謡字数考』 大日本図書株式会社 明治41年(1908年)6月刊。「童謡は、支那にては、周の宣王の時、童女の“檠弧箕服、実亡周国”と謡ひたるぞ初めなるべき、我が国にては、日本紀の皇極紀に見えたるを、尤も古しとす、夫より引き続き、斉明天智紀等にも見え、後の記録にも、一つ二つ出たり、何れの歌も、其の時代に生じたる事実を、他の事に寓せたるものにて、其の詞を暗ませて述ぶるがゆゑに、当時の人に非ざるよりは、解し難きことども多し、殊に斉明紀の「まひらくつ」の歌に至りては、後の学者、種々の注を為したれども、遂に一の明解を得ず、蓋し学者の古語などを考証して、一々解釈すべきものに非ざること、後世の俚謡の中に、何とも知り難き言葉のあると同一の事たるべし、されど童謡とはいへど、初めは心あるもの之を作りて、世に広め、やがて童子などの謠ひものとなれるなるべし、云々、」

^{iv} 北方のわらべ歌 わらべ歌の「カササギ豆腐買った」、「ちっちゃなネズミ」、それに遊戯歌の「大鋸それ引け(拉大鋸)」、「アン入りの餅を焼く(翻餅烙餅)」、「犬の肉煮えた(糊狗肉)」すべて瀬田充子・馬場英子編訳『北京のわらべ唄』I・II 研文出版 1986に見える。

「点牛眼」は、数人が坐ってそれぞれが隣同士で足指を合わせ、みんなで花の形になって、歌をうたい、歌の最後の文字があたった人はアウトになって片足を外す、もう一度当たるとその輪から弾き出され、遊びを見ているしかなくなる。たとえば「点、点、点牛眼、牛眼花、一根茄子倆大瓜、有錢的、買着吃、没錢的、去掉他。」なら、最後の「他」に当たった人がアウトになる。歌詞は出だしは同じだが、以後はさまざまなヴァリエーションがある。同じく遊戯歌の「白引き(碾磨)」、「敦老米」の方は未詳である。

「ひつじよひつじ草をはめ」『北齊書』楊愔伝に「羊羊喫野草、不喫野草遠我道、不遠打爾腦。」とあるが、二句目以後の意味が取れない。「羊は楊と為すなり」と注がつく。「羊」と「楊」は同音である。楊愔がのちに頭をぶちのめされて殺されたことの予言だとする。この童謡は『北史』楊愔伝にも見えるが、『北齊書』をなぞったものでそれ以上の注はない。『隋書』五行志に「可憐青雀子、飛入鄴城裏。作窠猶未成、舉頭失鄉里。寄書与婦母、好看新婦子。」齊の神武が初めて都を鄴に移した時の童謡だと言う。五行志はそれに続けて次のように述べる。「魏の孝静帝なる者は、清河王の息子である。后妃は神武の娘である。鄴都の宮室はまだ出来上がっ

ておらず、禪讓の時に当たったのに、巢作りがまだできてないということの徴である。孝静帝がついで崩じ、文宣（神武の第二子高洋）は孝静帝の後妃を太原長公主とし、楊愔に降嫁させた。時に婁后（神武の後）はまだいたので、故に書を婦母に寄すと言ったのである。新婦子とは、后妃を斥けたのである。」

同じく五行志に「狐截尾、儻欲除我我除儻。」（狐の尻尾切り、おまえは俺を除こうとするが俺はお前を除いてやる。）時の隴東王胡長仁が刺客をやって大臣である和士開を暗殺しようとしたが、事がばれて返り討ちにあったことを予言したのだという。狐の尻尾切りというのは大人の遊びでもあったようで、『北齊書』十永安簡平王浚の伝に「帝裸程為樂、雜以婦女、又作狐掉尾戲。」とある「狐掉尾の戲」がそれを語るだろう。文の前後から考えて卑猥淫靡なものであったことは想像がつくが、ただし具体的にどんな遊びであったかはわからない。

『新唐書』五行志二に「又祿山未反時、童謡曰、“燕燕飛上天、天上女兒舖白氈、氈上有千錢。”」（ツバメ、ツバメ、天にのぼる、天上では女の子が白毛氈を敷く、毛氈の上には錢千錢。）とある。安祿山は密かに燕国を称したという。

これらの「童謡」は皆歴史上の何らかの事件を予言して歌ったものとされるから、次の人事の歌と変わらず、どのみちゴタゴタした事情がついて回るのだが、周作人は出だしの句だけを取れば元は十分な「わらべ歌」であったと見たのである。

v 人事の歌 越の歌は皆『越諺』巻上に収録、「クモの巢」（喜子窠）、「三日月お月さん」（月亮弯弯）、「山楂ぶらぶら」（山里果子）何れも嫁入りを歌うもの。

vi 児戯の歌 縄跳びの歌は、『北齊書』巻八幼主伝に見える。「高いなあ」は原文「高末」（gaomo）、これは「高麼」（gaome）と同じ意味であろうが、史官の解釈によれば「高末の言は、蓋し高氏（齊主）の運祚の末なり」となる。『旧唐書』五行志に「元和初、童謡曰、“打麦打麦三三三。”乃轉身曰、“舞了也。”」とある。史官の解では、「武元衡、盜の害するところとなる、是元和十年六月三日なり。」「舞了也」は「Wuliao ye」で「武了也」つまり武は終わった、死んだことを言う。「盜」とは呉元済のこと。「三三三」は「六月三日」なのだろう。「打麦」一つが五年を意味するか。

vii 決択歌 「鉄脚斑斑」の歌 越音ではないが京音で表すと次のようになる。

Tiejiaobanban, bannguoNanshan. Nanshanliqiu, liquwanwan.

Xinguanshangren, jiuguanqingchu!

『明詩綜』の歌

Lilibanban, tiaoguoNanshan. Nanshanbeidou, liehuiJiekou.

Jiekoubeimian, ershigongjian.

『古今風謡』の歌

Jiaolubanban, jiaotaNanshan. Nanshanbeidou, yanghuojiagou.

Jiagoumomian, sanshigongjian.

viii 占いの歌 董卓の歌は『後漢書』五行志に載せる後漢献帝初年の京都の童謡で、「千里の草」は「董」の字を分解したもの、「十日の卜」も「卓」字の分解で、「千里の草、なんぞ青青た

る、十日にトせば、生くるを得ず」という童謡の意味は、董卓は威勢を振るっているが占いによるとたちまちにして失勢するだろうというもの。次の「小兒天上口」は唐の呉元済のことで、「小わっぱの呉」でやはり文字分解が謎解きの鍵になっている。「天上の口」とは今の中国の現代漢語通用字の「吳」字そのままである。この呉元済は韓愈の有名な「淮西を平らぐの碑」の平らげられた賊の大將である。しかしこの「小兒天上口」と言う句は新旧『唐書』の五行志にも、伝にも見えない。今の所周作人が何から引いたのか未詳。

^{ix} 「燕燕尾涎涎」 「燕燕 尾は涎涎、張公子、時に相見ゆ。木門の倉琅根に、燕飛来し、皇孫を啄む、皇孫死して、燕矢を啄む。」『漢書』五行志に引いて言う、「成帝の時の童謡なり、後帝微行出遊をなし、常に富平侯張放と與にし俱に富平侯の家人と称す、陽阿主に過りて樂を作す、舞者趙飛燕を見てこれを幸す、故に「燕燕 尾涎涎たり」という、美好の貌也。「張公子」とは富平侯を謂うなり。「木門倉琅根」は宮門の銅鍔〔銅環〕を謂う、將に尊貴ならんことを言うなり。後遂に立てて皇后となし、弟の昭儀と與に後宮皇子を賊害す、卒には皆辜に伏す、所謂「燕飛来し、皇孫を啄み、皇孫死して、燕矢を啄む」ものである。」『樂府詩集』八十八、『玉台新詠』九にも採る。

^x 『天籟集』 杭州地方の俗歌を集めたもの。錢塘の鄭旭旦輯、同じく許之敘校で同治壬戌芝秀軒刊本があり、その後山陰の悟痴生が編録した『広天籟集』と合訂した中原書局本、それを『各省童謡集』（第一集）の付録とした1926年商務印書館版活字本、さらにそれを影印した上海文芸出版社の「民俗・民間文学影印資料三十七」がある。ちなみに『天籟集』も『広集』の方もともに一卷本で周作人の言う「巻一」があるわけではない。『天籟集』は全四十八首中一首を欠いて全四十七首を集め、『広集』は全二十三首を集める。「石榴花開いては葉は稀なり」はその第十二、「姉さんお部屋でニーコニコ」は『広集』の第三に見える。なお上文の「一つ星」は第四十二、「雨まじり雪まじり」第二十二に見えるが、「天裏一顆星、樹裏一隻鷹」はどこから来たのか未詳。

^{xi} 北京のわらべ歌 「一陣秋風一陣涼、一場白露一場霜。嚴霜单打独根草、螞蚱死在草根上。」
出處未詳。

^{xii} 『隋書』五行志上に云う、「陳初、有童謡曰、“黄斑青驄馬、発自寿陽浹。来時冬気末、去日春風始。” 其後陳主果為韓擒所敗。擒本名擒獸、黄斑之謂也。破建康之始、復乘青驄馬、往反時節皆相応。」これは『隋書』卷五十二、韓擒伝にも載せるところで、錢大昕の『二十二史考異』には唐人「虎」を忌み、「武」か「獸」「彪」の字に替えるが、ここで名を「豹」とするのは童謡の「黄斑」に対応するためで、「虎」も「豹」も皆斑紋があり、「黄」「韓」の声もとても近いと言う。中華書局二十四史本は「韓擒虎伝」と作るが、百衲本は「韓擒伝」と「虎」を欠く。また五行志の方は「童謡」とするが、伝は「謡歌」とする。

* 宋長白 名は俊。清の山陰、つまり紹興の人。その著『柳亭詩話』卷六「婦姑妯女」の条に「歌謡にも亦七字を以て文を成す者あり、然れども一二の語に過ぎずして止む。惟漢書五行志に、桓帝の時の小麦の謡、城上の鳥の二首を載す、竟に古樂府に入るべし。その一に曰く、「小麦青々大麦枯る、誰ぞ当に穫るべき者ぞ、婦と姑なり、丈夫は何くに在りや西に胡を撃つ。吏は

馬を買い、君は車を具う。請う諸君の為に隴胡を鼓さんことを。」その一に曰く、「城上の鳥、尾は畢く逋^かく。公は吏と為り、子は徒と為る。一徒死して、百乗の車。車は斑斑として河間に入る。河間の妊女〔少女〕工は数銭、銭を以て室を爲り金もて堂を為る。石上慊慊として黄梁を舂づき、梁下に懸鼓有り、我之を撃たんと欲するに丞卿怒る。」李天生太史の評注甚だ佳し、宜しく詳玩すべきなり。」そして小注では「漢魏の楽府は、強半は歌謡に近く、起伏断連して、自ずから草蛇灰線の勢いあり。六朝は声口韶秀なれど、意ありて文を為る、近きに似て実は遠し。唐人は組織穠麗なれど、人功勝り、天工薄し。宋人は好んで議論を用い当に行わる当きに非ざるに似たり。元明以還は、皆樊籬の外にあり。」と述べている。

周作人文集翻訳叢刊序

周作人が書いた書物に関する文章は、先に出した『周作人読書雑記』全5巻（平凡社東洋文庫）にだいたい訳したが、彼の著作は翻訳の他は大抵が書物に関わらないものはないので、漏れたものも多い。これはそれを補おうというのではないが、補う分も含めて周作人が出版した最初の形にして日本の読者に読んでもらおうとしたものである。というのはやはり書物という視点からだけでは、彼が民国期の文化において果たした役割というか、彼の全体像が見えにくい。その全体をつかむためには、やはり彼の著作をそのまま提示するのが一番だろう。周作人の著作は1980年代の半ばに解禁され、1998年にはテーマ別編集の『周作人文類編』（湖南文芸出版社・全10冊）が編まれ、2009年4月には編年体の、索引も含めた『周作人散文全集』全15巻が広西師範大学出版社から出て、日記や手紙を除いた現存するほとんどの文章が読めるようになった。そういうわけで読書環境が整備され、中国では一時に爆発的なブームを引き起こし、今では少し落ち着いているようだが、近代作家としての認知は回復したように見える。極めて優秀な才能と文学的感覚を持ちながらほとんど日本の中国侵略によって潰されたと言ってよいこの作家の作品を、少しでも日本人に読んでもらいたいと思う。中国での動向に促されてか、日本でも次第に周作人に興味を持つ人は増えてきている。しかし研究者など原文が読める人はよいが、読めない人にとっては依然蚊帳の外である。この翻訳は自分で周作人を読むと同時に、元々そうした人々に読んでもらえば、周作人という民国時代の文人がその時代にどういうことを言っていたのかを知り、読者自身が自分で論を立てるにしろ、彼をめぐる議論に参加するにしろ、一応基礎的な資料としての役割を果たせるのではないかと思ったのである。もっとも専門家の議論にしたところで、この人本当に読めているのかというようなところはなきにしもあらずで、難しいところはあ。しかしそんなところはよくわからないと言えば済むことで、それよりもっと難しいのは、小品文の名手と言われた彼の文章の文学的香気とも言うべきものを訳出できているかである。それはこの際あっさり目を瞑ってもらい、のちの文才ある人の翻訳を待ってもらうしかない。ただ散文は詩とちがって意味の繋がりがまだ比較的取りやすい。それを頼りにだいたいのところを掴めるようにと心がけた。

翻訳に際してのもう一つの難題は、彼の文中に引用せられた外国語の文章をどうするかという問題である。抄文公、つまり引用魔とでも言おうか、と称せられた周作人の文章には、様々な書物からの引用が山盛りである。ただ日本の読者ということを考えれば、ギリシア語や英語からの引用は周作人の翻訳をそのまま重訳するしかない。問題は引用されたのが日本文の場合である。たとえば『徒然草』や芭蕉の紀行文など、日本人によく知られた文の引用を、周作人がいくらかく中国語に置き換えていたにしろ、そこからの重訳では気が抜けてしまい、日本の読者にはかえって奇異な感じを与えるだろう。特に原文が詩歌になるとそれが突出してくる。わたしが試みた中国語訳された俳句や川柳からの復元では、たった一句「蝙蝠や人買船の岸による」がまぐれ当たりで戻っただけで、川柳の「お前たち何を笑うか爺様の屁」は残念ながら「爺様」は原文で

は「隠居」であった。短詩は言葉がイメージだけで繋がるのでまだまぐれもあり得るのだが、短歌になるともうダメである。それで日本の読者には引用の原文をできるだけ持ってくる方が、その文章を周作人がどういう文脈の中でどのように引いているのかが分かりやすいだろう。そう考えて先に出した『周作人読書雑記』では努めてそうした。しかし周作人が前にした原文の光景がどういうものであったかはそれでよく分かるが、彼がそれをどのように取ったか、どのように理解したか、どのように解釈したかは、また別問題で、それを見るためには引用部分の翻訳（中国語）を文章全体の文脈と主旨との関連からできるだけ正確に重訳して、必要なときには注釈をつけるより他に手はない。本来的には翻訳である以上そうするのが真つ当であると思う。ただここに訳した文章では、あるものは原文を引いたり、あるものは重訳したりして、二つの間を揺れ動いていて一定していない。どちらかに決めた方がよいのか、それもまだ決めかねているのである。この問題は他の外国語の場合でもたぶん同じことだろう。それぞれの言語に堪能な人が詳しい注釈をつけてくれることを待っている。

なお読んでもらえばわかることだが、文集ごとの翻訳とは言い条、『読書雑記』に所収のものは巻数を指示してあるのでそちらをご覧いただきたい。また戦後の翻訳では、周作人の日本関係の文章を集めた木山英雄さんの『日本談義集』（平凡社・東洋文庫 2002年3月）が拙訳よりはるかに優れているので、そこに収録された文章は凡て木山さんの訳におんぶすることにして、目次にその旨を示した。

以上はいわゆる能書きをまとめた前口上である。実のところ『颯風』の広告にも載せたように、教師をしていた頃から教室で読んだりして、訳し貯めたものがますますの分量になっているので、ゆっくり注をつけて訳文も吟味してそのうち公表できるようにしておこうと考えていた。ところが気がついてみると、自分にはそれだけの時間が残っているのかどうかさえ怪しくなってきた。そこで老後の仕事はとりあえず放っておいて、今ある分を『颯風』の資料庫に入れてもらって、興味のある人に読んでもらうことにした、というのがほんとうである。その作業の最中、戦後初めて周作人の民俗学的な方面の仕事に本格的なメスを入れられ、中国民話学とでもいうべき分野を開拓された飯倉照平さんの訃報が伝えられた。はるかに敬意を払っていた飯倉さんはわたしより先輩だが、そのことでもいよいよ自分の持ち時間を意識することになった。

むかし人の文章を読んで、これはなんだろうと思うところに注が振ってあって、さてどうだと注を見れば「未詳」とくる、それを見てもどかしい思いをしたものだが、注をつける立場に立って見て、ああこれはこういうことなのだろうと思うようになった。つまり論者や訳者にも解らないから、このことについては知識や見聞もなく解りませんので、ご存知の方がありましたらどうぞお教を賜りますようにという信号なのではないか、と。これらの翻訳にはそういうつもりで「未詳」をつけたので、一体どれだけの「未詳」がつくのか数えたことはないのだから分からないが、お気付きの方がおいででしたらどうかご教示を吝しまれませんか。そして「未詳」のみならず、本訳文の誤訳や欠陥などのご指摘もお願いしたい。

予告には夏休みまでに追い追い公開したいと書いたが、読み返しに思いの外時間がかかって、夏休みはとっくに終わってしまった。今後もこの調子でいくとかなり時間がかかりそうだ。食言をお詫びするとともに、そのことも予め白状しておく。

なお表紙の写真については主に佐原陽子さんの助力を得、オンライン上の様式・構成の作成は高井美香さんに依頼した。お二人の協力に感謝する。

2019年9月15日、五四運動百周年に際してかろうじてその糸を繋いだ香港の抗議運動の行く末を案じて。

周作人文集翻訳叢刊凡例

- 一、翻訳の底本は原刊本ないしその影印本とした。正確には初出誌から直接訳したものもあるが、整理の過程で一通りは原刊本と対校した。
他に岳麓書社版周作人各文集・河北教育出版社版『周作人自編文集』・『周作人文類編』・『周作人散文全集』等を適宜参照した。
- 二、各文章の末尾にその初出誌を示した。
- 三、『周作人読書雑記』（平凡社・東洋文庫）全5冊に既収の文章は収録せず、目次にその巻号を示した。木山英雄氏訳『日本談義集』（平凡社・東洋文庫）所収の文章は収録せず、同様にそのことを示した。
○○→『読書雑記』第○巻
○○→『日本談義集』
- 四、先行する文集にすでに収録済みであるものは、上記と同様に当該の文集には収録せず、先行する文集名を示した。例えば、『談龍集』所載の「日本の諷刺詩」はすでに『自分の畑』に収録されているので、次のように示した。
「日本の諷刺詩」→『自分の畑』
- 五、注釈は精粗一定しない。本文中〔 〕の中は訳者の注である。
- 六、注釈に用いた写真版はほとんどが **Internet Archive** からの借用である。これには大いに感謝の意を表す。

二〇二四年十二月十五日発行 第一版

周作人文集翻訳叢刊
『児童文学小論』

訳者 中島長文©

発行所 雙楡書屋